

第41回「全日本中学生水の作文コンクール」
入賞作文集

水について考える

主催 水循環政策本部・国土交通省・都道府県
後援 文部科学省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・環境省・
全日本中学校長会・水の週間実行委員会・独立行政法人水資源機構

第41回 全日本中学生水の作文コンクール について

水は人間や動植物といったあらゆる生命の源であり、社会経済活動に欠かすことのできない最も基礎的な資源であり、限りある資源でもあります。

「水の日」及び「水の週間」は、水の大切さや水資源開発の重要性に対する国民の関心を高め、理解を深めるため、昭和52年の閣議了解により政府が定めたものです。年間を通じて水の使用量が多く、水についての関心が高まる時期である8月の初日を「水の日」（8月1日）とし、この日を初日とする一週間（8月1日～7日）を「水の週間」として、水に関する様々な啓発行事を毎年実施しております。

この「全日本中学生水の作文コンクール」は、昭和54年より「水の日」・「水の週間」行事の一環として、次代を担う中学生の皆さんに、日常生活での体験あるいはご家族や先生方から学び聞いた話などをもとに、「水について考える」というテーマで実施しているものです。

平成26年3月に水循環基本法が成立し、8月1日は法律で定められた「水の日」となりました。このことから、「全日本中学生水の作文コンクール」を政府全体の取組とするため、最優秀賞に内閣総理大臣賞を、優秀賞に関係省大臣賞を創設したところです。

今回は、全国（海外を含む）の中学生から12,760編（学校数290校）の応募があり、自らの体験を通じ日常生活における水の貴重さを表現したもの、美しく豊かな水を未来へ受け継いでいくために水を大切にしていこうという気持ちが表現されたもの、過去に各地で発生している地震や豪雨災害等の経験を通じて水について考察したもの等がありました。

このたび、入賞作文42編を作文集にまとめましたので、多くの方にお読みいただき、学校やご家庭において、「水」について考えるきっかけとしてご活用いただければ幸いです。

最後に、作文コンクールの実施にあたり、応募された中学生の皆さんや担当の諸先生方、またご多忙のところ審査をいただきました審査委員の先生方に厚くお礼申し上げますとともに、ご協力いただきました文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、都道府県、全日本中学校長会、水の週間実行委員会及び独立行政法人水資源機構等関係の方々に深く感謝申し上げます。

令和元年8月

国土交通省 水管理・国土保全局 水資源部

「水の日」・「水の週間」について

「水の日」及び「水の週間」については、昭和52年5月の閣議了解を基にその行事等を実施して参りました。諸行事の実施により我が国の水問題の解決を図り、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することを目的に、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている8月の初日である8月1日を「水の日」、この日を初日とする一週間を「水の週間」としております。

「水の日」及び「水の週間」について

閣議了解
昭和52年5月31日

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため、「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年8月1日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

平成26年3月に水循環基本法が成立しました。本法律では、水が健全に循環し、そのもたらす恵沢を将来にわたり享受できるよう、水循環に関わる施策を包括的に進めていくことが不可欠であるとされました。また、同法第10条において、「水の日」が8月1日と規定され、国及び地方公共団体は水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならないとされています。

水循環基本法（平成二十六年法律第十六号）

（水の日）

第十条 国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水の日を設ける。

2 水の日は、八月一日とする。

3 国及び地方公共団体は、水の日趣旨にふさわしい事業を実施するように努めなければならない。

全日本中学生水の作文コンクールは、広く国民が水の重要性についての理解と関心を深めるための普及行事として、「水の日」・「水の週間」行事に位置付け実施しているものです。

目次

最優秀賞 (一編)

《内閣総理大臣賞》 水・・・時空を超えてすべてをつなぐ 福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 一年 宇野 誠洋 1

優秀賞 (九編)

《厚生労働大臣賞》 自然の恵みが世界中に届くことを願って 群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 二年 福田 優花 2

《農林水産大臣賞》 水神様への感謝を現代に 宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 二年 亀岡 千愛 3

《経済産業大臣賞》 「世界水の日」について気づいたこと 群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 二年 丸山 佳大 4

《国土交通大臣賞》 ともに未来を望みて 神奈川県 横浜国立大学附属中学校 二年 柳川 心菜 5

《環境大臣賞》 ふるさとの水物語 熊本県 熊本大学教育学部附属中学校 一年 樋口 頌子 6

《全日本中学校長会会長賞》 水の二面性 佐賀県 佐賀大学教育学部附属中学校 二年 北村 竜清 7

《水の週間実行委員会会長賞》 水という存在 インドネシア共和国 ジャカルタ日本人学校 二年 木下 結花 8

《独立行政法人水資源機構理事長賞》 人災を封じ災害を防ぐ 愛知県 扶桑町立扶桑中学校 二年 真野 聡真 9

《中央審査会特別賞》 水と共に生きる 岩手県 陸前高田市立高田第一中学校 二年 小野寺 麻緒 10

入選 (三十二編)

北海道 長沼町立長沼中学校 三年 田近 峰々 27

青森県 八戸市立是川中学校 二年 工藤 小陽 28

青森県 八戸市立是川中学校 二年 林 かれん 29

青森県 むつ市立大湊中学校 三年 辻 啓生 30

福島県 西郷村立西郷第二中学校 三年 佐藤 壮真 31

茨城県 土浦日本大学中等教育学校 一年 網永 莉々 32

栃木県 佐野日本大学中等教育学校 三年 澤井 優実 33

群馬県 群馬県立中央中等教育学校 二年 原 隆太 34

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 二年 原 隆太 35

埼玉県 浦和実業学園中学校 一年 山田 眞子 36

東京都 新宿区立新宿西戸山中学校 三年 古川 眞大 37

神奈川県 聖園女学院中学校 一年 小泉 晶絵 38

神奈川県 洗足学園中学校 二年 藤井 琴子 39

神奈川県 洗足学園中学校 二年 藤井 琴子 40

富山県 高岡市立牧野中学校 二年 西川 眞由 41

富山県 高岡市立清水第八中学校 三年 飯塚 颯 42

静岡県 静岡市立清水第八中学校 三年 飯塚 颯 43

資料

第四十一回「全日本中学生水の作文コンクール」募集ポスター 44

第四十一回「全日本中学生水の作文コンクール」概要 44

第四十一回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査等優秀者名簿 45

第四十一回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況 46

第四十一回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移 47

第四十一回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式 48

48 47 46 45 44 44 43

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

水：時空を超えてすべてをつなぐ

福岡県

福岡教育大学附属福岡中学校

一年

宇野

誠洋

私は水が大好きです。実は学校に毎日持っていく水筒の中身を水にしたいのだけれど、「お茶は栄養や殺菌効果があつていいのよ。」と母に言われて、無理に持たされます。しかし、走って登校すると水筒のお茶は泡だらけで、飲んでも口の中がすっきりしません。結局学校の水道水を飲むこととなります。特にスポーツのあとは水に限ります。飲むとからだ中が透き通るような最高の気分になるからです。

先日、探査機「はやぶさ2」の成果で、小惑星リュウグウにも水があったようだと発表されました。さらに、リュウグウの水と、私たちが飲んでいる地球の水は「生みの親」が同じらしいということに、私は大変驚きました。はるか宇宙の彼方にあるリュウグウとこの目の前の水道水はつながっていたのです。

そして理科で習ったように、そもそも飲み水となる雨は、地球の自然の原理で大昔から循環してきたものであり、この水も大昔の水の生まれ変わりだと言えます。

その水を利用して水道水が作られ、毎日私たちの体の中に水が入ってきます。体のほとんどが水でできているという私たちは人間にとつて、生きるのに欠かせない「水を飲む」という行為は、実ははるか遠い宇宙と、そして恐竜がいた太古の昔とをつなげる、時空を超えてつながる行為だったのです！地球上で植物は水を利用して成長し、それを食べて生きる草食動物を肉食動物が食べる、この食物連鎖で自然界は成り立っています。このように命をつなげていくことにおいても、すべての場面で水がないと始まりません。つまり、水は時空を超えてすべての命をつなげるものなのです。

春の訪れを感じる先日、私は現在建設中の小石原川ダムを見学しました。一昨年、九州北部大水害で被災した東峰村に位置する建設現場で、私は二つのことを学びました。

一つは自然保護のために、環境アセスメントを実施し、もともとそこにあつた環境を壊さないために、ていねいに徹底して保護活動をする姿勢です。小石原川ダムの場合、朝倉地方の豊かな自然の中にそれまで住んでいた動物達の保護や、貴重な種類の木を植え替える。そして仕方なく切った木を補償するため新たに植林しつつ野生の鹿に若木を食べられないように一本一本ていねいにカバーを掛けて保護するなど、樹木医も関わる活動を見学してその愛情を実行する行動に感動しました。

もう一つは自然の犠牲や負担、そしてコストを減らすために、現地の自然環境を最大限に生かして工夫する姿勢です。近くにある二つの山を門のように利用するアーチダムや、現地とれる鉱物を利用したロックフィルダム、そして最終手段としてのコンクリートダムの選択など、ダムの形式を自然に優しい視点で選ぶ工夫がされていることを知り、その知恵の深さに思わずうなりました。

実は見学をする瞬間まで、ダム建設とは人間が生きていく上で欠かせない飲み水の確保のために、必要最低限自然を切り拓き壊すしかない行為だと思ひ込んでいました。ダムは人工物として最大の建造物であり、威風堂々とそびえ立つ恐ろしいくらいの人間の力を見せつける物のように見えていました。しかし事実は違いました。人間と自然が共存するための手段だということに気付きました。それは自然を大切にしつつ自然の一部である人間を生かす方法だと発見しました。この瞬間、ダムと大それた地球と宇宙がつながり一つになって透き通った水になり、静かに私の中に流れてきて、さわやかにからだ中がうるおいいっぱいになる感じがしました。

今日も水道水を飲みます。そしてあの日以来それはいつそうおいしくなりました。だって水を飲むたびに、無数の星々が輝く大宇宙を泳いでいる様な気持ちになれるのですから。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

自然の恵みが世界中に届くことを願って 群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 二年 福田 優花

校庭に設置された水道に駆け込み、部活で乾いた喉をよく冷えた水で一気に潤す……。まさに私が生き返る瞬間だ。家でも外でも、蛇口をひねれば、無色透明で安全で、なんの心配もなく水を飲める事が当たり前である私達の暮らし。そんな日常が、実は当たり前ではなかった事を知ったのは、一昨年、初めて家族で東南アジアの国々を訪れた時だった。

「ここのお水は飲んでも大丈夫？」母に確認するまでもなく、ホテルの洗面台には、「飲料水ではありません」の表示。そしてシヨックだったのは、歯を磨く時に口を含む水用のペットボトルまで用意されていた事だ。飲み水の希少性を思い知らされると、ペットボトルの水を購入できる店ばかり気になり、結果的に必要以上にリュックサックに溜めこんだ水のせいで、肩が痛くなってしまうのは想定外の思い出だ。同時に、日本のように海に囲まれ、朝晩スコールに見舞われるほどの豊富な水に恵まれた国々で、蛇口の水は飲んではいけないという理不尽な現実を目の当たりにさせられた経験でもあった。

中学生になって、世界の地理を深く学習する中で、東南アジアの多くの国が高温多湿な熱帯雨林気候に属し、年間降水量が多い一方で、実は雨期と乾期の季節変動が大きく、これらの国々では水の管理が重要な課題となっている事を学んだ。また、近年の気候変動が、単に温暖化という気温上昇だけでなく、雨の降り方や風の吹き方にも影響を及ぼし、大量の雨が短時間に降る事で、洪水被害をもたらしたり、逆に雨が全く降らなくなった地域では、農作物への被害から人々の生活が困窮したりと、水を起因とする多くの問題をもたらしている事も知った。つまり、それは水の量⇨安全な水の供給という公式が成立するほど単純な世界ではないということだ。

私の祖父は長年、行政で水道事業に従事し、定年退職した今でも、安全で十分な量の水を市民に届ける使命を誇らしく語り、家の水が一番お

いしいと言っている。私も全く同感だ。しかし、そんな祖父が子供の頃は、大雨で川が氾濫し家が浸水したり、汚水による伝染病が流行ったりしたこともあったそうだ。それが戦後、日本の産業の急成長と共に、上下水道に関する法律が整備され、厳しい水質審査基準を満たす技術が発展し、これを安定的に維持する社会のシステムが整い、今、ようやく私達は日本中どの蛇口をひねっても安心して飲み水として利用できるようになった長い歴史があったのだ。何十年もかけてダムを建設し、地下水を掘り出し、水を浄化し、全身をめぐらす血管の如く日本中の地中に水道管を張り巡らし、規則正しいメンテナンスする為のお金が膨大であることは想像に難くない。こうした社会の仕組みを構築する技術やお金を負担できないことが、水資源に恵まれながら安全な水を供給できない国々の課題ではないだろうか。

毎年五月になると家の近所の浄水場が一般開放され、敷地内一杯に咲き誇るツツジ鑑賞に出かけるのがこの季節の我が家の恒例行事だ。鮮やかな花も見事だが、不純物がろ過され澄みきった貯水槽に、青空が鏡のように映し出される水面もまた言葉にしがたい感動がある。

今年も間もなくこの季節を迎えようとしている。上毛三山に降り注ぐ雪や雨は、天然のろ過装置である地中を通り、利根川や広瀬川から注がれる水質の良い地下水は、ここで最終浄化の行程を迎える。こんな豊かな水の街に生まれたことに感謝しつつ、飲み水の格差がもたらす諸外国の問題にも目を向け、自分が、そして日本が世界に貢献できることを考えてみたい。

農林水産大臣賞（優秀賞）

水神様への感謝を現代に 宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 二年 亀岡 千愛

日本には八百万の神々といわれるように、非常に多くの神々がいる。例えば山神、火神、氏神、水神などである。

このように、古来から日本人は、身の回りのあらゆるものに神々が宿ると考え、自然をととても大切にしてきた。

私の家のお墓参りは半日がかりである。その場所に行くのにも車で数時間かかる上、そこからさらに山道を登っていかなければならない。やっつとご先祖様のお墓について、頭を下げて、これで終わりではない。さらに、山の中腹にある山神様、その奥にある大きな湖のほとりにある水神様、山のふもとの地神様と氏神様など、たくさん神様のほこらに榊をあげ、頭を下げていく。

小さい頃は どうしてこんなにたくさん山道を歩いてたくさん頭を下げなければならぬのか、お墓参りに行くときは、いつも不思議に思っていた。

また、もう一つ不思議なものがあった。それは山の中腹にある大きな湖だ。カルデラ湖でもあるまいし、なぜこんなところに湖があるのだろうと思ひ祖父に尋ねたことがあった。

水神様のすぐ横にある湖、それはご先祖様が村の人々と共に力を合わせ、山のふもとの田畑に水を供給できるように人工的に造った「ため池」だという。

そう教えてくれた祖父の後についていくと、水神様の横にあるため池にはたしかに、人工的に造ったとわかる水門やふもとの村へつながる水路などが木々にかくれてひっそりと存在していた。

自然を生かし、豊富な山の湧き水を上手に山の中腹のため池にたまるよう設計し、さらにそこから山の傾斜を利用してふもとの田畑に分配するという昔の人々の知恵に、私はとても感動したことを覚えている。

日照りが続いた時でもそのため池があったおかげで、村では米づくり

ができたのだという。

いつもは、鳥が羽を休めに来るような静かな湖のようだが、実は村の人々の生活を支える大切な「水源」だったと知り、驚きと共にとても感動した。

すると、おのずと水神様に頭を下げる理由もわかってきた。

水の恵みのおかげで木が育つ。米が育つ。野菜が育つ。魚が育つ。そして、その木で家を建て、米や野菜や魚を食べて人が育つてゆく。

川となり、海となり、霧となり、雲となり、雨となり、水となり、姿を変え、形を変えながらあらゆる物を生かし育てる水。

だから水を神様としてあがめ、感謝するのだろう。

このように、昔から日本人は自然のあらゆる恵みに感謝する心を持ち、たくさん神々をあがめてきたのだ。

ところが今の日本では、そんな考え方がうすれ、自然の恵みに感謝するどころか、水道の蛇口をひねればきれいな水がいくらでも出てくるというのが「あたりまえ」になっているように思う。

しかし、その「あたりまえ」は、自然災害などがおればいとも簡単にくずれ去る。あたり前の物が有り難いものへと変わったとき、人はやっつと自然のおそろしさとともに、ありがたさを実感するのかもしれない。未曾有の災害が相次ぐ今の日本、そんな今だからこそ私たちは、私たちの生命の源でもある「水」に感謝する心を取り戻さなければならぬと思う。

私たちに計り知れない恵みをもたらしてくれている豊かな水資源に感謝し、大切にしていきたいことが、私たちや、後世の人々の豊かな生活につながっていくのだと思う。

経済産業大臣賞（優秀賞）

「世界水の日」について気づいたこと 群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 二年 丸山 佳大

「三月二十二日は世界水の日」新聞で、僕は初めて知った。水資源の開発・保全に関し普及・啓発を行うことを目的とし国連総会で定められたものだ。エチオピアでは、一人につきわずか五リットルの水を得るために、子供が炎天下の砂漠を毎日八時間かけて給水場まで歩かなければならない。しかもその水は茶色である、と新聞のコラムは伝えていた。日本では、家庭や公共施設、飲食店などどこでも蛇口から当たり前のように清潔な水が出てくる。「このきれいな水はどのようにして全国にいきわたっているのだろうか？」僕は水の供給とダムとの関係について興味を持ち春休みを利用して八ッ場ダムに見学に行くこととした。八ッ場ダムは現在建設中であり、今年度末に完成予定だ。実際にダムを近くで見ると壮観で、スケールの大きさに驚くとともに、見学者が多かったことにも驚いた。

八ッ場ダムは、利根川水系の代表的な支川である吾妻川の中流の長野原町に建設中の多目的ダムである。その役割の一つ目は、水道水の安定供給である。水源として予定している区域は群馬、東京、埼玉、千葉、茨城と広範囲にわたり、利根川上流の唯一の貯水施設としての役割を担うこととなる。利根川上流の降水量は、少雨の影響により降水量が減少傾向にあり、渇水による取水制限が実施され僕も経験したことがあるが、水が自由に使えないことはこんなにも不便なのかと思った。ダムにより水の需要に対応できる供給ができることで、とても安心して生活できる。二つ目は、利根川の治水対策である。大雨で川が増水したとき、大量の水をダムに貯水し下流への放流量を調整して河川の氾濫を防ぐ洪水調整機能を担っている。一昨年豪雨により川の堤防が決壊することがあったが、ダムにより群馬県や利根川下流部の広範囲にわたり洪水被害が軽減される。三つ目は発電機能で、ダム下流に新設される八ッ場発電所において発電が行われる。

このように僕たちの生活に役立つダムであるが、一方で、八ッ場ダム建設に至るまでには、そこに暮らす人々の様々な苦悩の歴史があった。昭和二十七年にダム建設の計画当初住民の人々は、首都圏の人たちのために故郷が水没するとし、ダム建設に強く反対した。その後の話合いで住民の人たちの苦渋の選択により建設が始まった。ダム建設により移転をする家屋は四百七十世帯にのぼる。ダム建設の計画から六十七年もの長い年月、様々な問題があり、それを乗り越えてきた人々の苦勞を忘れてはならないと思う。県や長野原町では現在、水没してしまう地域の生活再建事業にとっても力を入れている。

国連は二〇三〇年までに「安全な水とトイレを世界中に」を目標に掲げた。容易に安全な水を飲むことができれば、健康が維持でき、また下水道整備によりトイレが普及することで人々の生活の向上や経済発展に繋がる。そのためには、僕は、水やトイレが十分でない世界の地域に、日本のダムや浄水場といった利水、治水などの技術をもっともつと生かすことができなかつたかと考える。世界中にきれいな水とトイレを供給することに貢献できれば素晴らしいことだと思ふ。

「世界水の日」は僕にとって水の大切さを知るともよいきっかけとなった。僕の住む市に送水している県央第二水道では、群馬用水赤城幹線から水を取り入れ、浄水処理を行い水道水をつくっている。その後受水施設を経ようやく家庭に水がいく。

日本では、どこでも安全な水があり、トイレがあることは本当に幸せなことだと思ふ。僕は大自然の恵みと人々の英知、そして人々の多大な苦勞により、毎日安全でおいしい水を飲んだり使えたりできることに感謝し、水を無駄使いせず大切に使用しようと強く思った。

国土交通大臣賞（優秀賞）

ともに未来を望みて

神奈川県 横浜市立汐見台中学校 二年 柳川 心菜

手を洗うとき、米を炊くとき、お風呂に入るとき。私は当たり前のように、毎日本水を使っています。蛇口をひねれば、いつでもきれいな水が出てきます。でも、このきれいな水はどこからくるのでしょうか。ダム。今までの私にとって、身近に感じたことはあまりありませんでした。でも、このダムが、実は私たちにとって、とても身近で重要な存在だったのです。

ダムを造るには、とても広い土地が必要です。そのためには、そこに住んでいた人々が移動しなくてはならないこともあります。私がお世話になっている宮ヶ瀬ダムの場合、一九七七年、もともとあった村はダム湖となり、そこに住んでいた一三六人の人々は他の町への移動を求められました。私がその村に住んでいたらどう思うのでしょうか。ダムのために、自分の家とも、楽しかった学校とも、仲の良かった近所の人とも、みんな『さよなら』です。そんなこと、嫌に決まっています。しかし、実際にそのようにして、ダムのために住んでいた場所から移動せざるを得なかった人々がたくさんいるのです。自分たちがもともと住んでいた場所が水の下に沈んでしまったと思うと、とても辛いでしょう。

少し前に、こんなニュースを見ました。宮ヶ瀬ダムの水位が減って、湖の下に沈んでいたガードレールや車の標識などが見えたそうです。インターネットで画像を見てみたところ、なんだかとても悲しく、切なくなりました。決して私が住んでいたわけではありません。しかし、胸がギュッと締めつけられるような複雑な気持ちになりました。

宮ヶ瀬ダムには、湖に沈んだ村に住んでいた人々のために、当時の神奈川県知事、長洲一二さんが贈った言葉が書かれた『望郷の碑』があります。

愛しき宮ヶ瀬の里
静かに湖底に眠る

ともに未来を望みて

湖岸に立つ

神奈川県知事だつて、ダムを作ってくれた方々だつて、村に住んでいた人々を困らせたかったわけではありません。絶対に『望郷の碑』にも書かれていたように、神奈川県を望んで造られたのです。村が湖に沈むことが決まったとき、ダム造りの計画に携わった方々もとても辛かったです。

ただ、その村に住んでいた人々、宮ヶ瀬ダム造りを計画してくれた方々、工事をしてくれた方々、それらの人々のおかげで今の私たちの住む神奈川県の水が守られていることは事実です。大雨のときには一時的に水を貯留し、中津川流域や相模川下流で暮らす人々のいのち・財産を守り、河川の流量を維持し、流域の生態系を守り、私の住む横浜市を含む十六市五町に水道原水を供給し、神奈川県に住む多くの人々の水道水を守っています。さらには、発電までしています。だから私たちは、蛇口をひねればいつでもきれいな水が使えるのです。

私は今まで、このような人の気持ちなど考えたことがありませんでした。みなさんはどうですか。このような人々がいることをしっかりと理解しながら水を使っていましたか。これまでの私は、水を大切にと言われて真っ先に思いつくのは水道代のことでした。でも、今は違います。ダムのためにこれだけ辛い思いをした人がいることを知り、その人たちのことも考えながら、水を大切に使うように思えるようになりました。

明るい未来を望んで造られた宮ヶ瀬ダムのおかげで、今日も私はきれいな水を使うことができます。宮ヶ瀬ダム、ありがとう。

環境大臣賞（優秀賞）

ふるさとの水物語

熊本県

熊本大学教育学部附属中学校

一年

樋口

頌子

私達家族は今年四月、富山から熊本に引っ越してきました。十一年間過ごした富山は家から立山連峰が一望でき、そこからの雪どけ水で水道をひねればいつでもおいしい水が飲めます。そのおいしい水で炊きあげたご飯と富山湾で獲れた魚の食事は私の好物であり、また私をここまで育ててくれた命の源でした。

新生活は水のイメージとは正反対の「火の国」熊本。私はおいしい水がまた飲めるのか心配でした。

しかし、実際飲んでみると、熊本の水はとてもおいしいのです。そこで私はこのおいしさはどこからくるのか興味を持ち調べてみました。

熊本の水道水は阿蘇西麓から川へ流れ、森や田畑から地下へ浸透し、バランスよくミネラル分や炭酸分を溶かし込んでおいしい地下水となります。熊本市はその水道水のおぼすべてを地下水でまかなっており、これは世界的にもめずらしいことだそうです。私はこの水のおかげで思ったよりすんなりと熊本になじむことができました。そして、現在九十九パーセントの水道普及率の日本ではどこでも蛇口をひねれば安全な水が飲めるのだと改めて気づかされました。

水について調べていくうちに、富山と熊本の水に関する悲しい過去の共通点を見つけました。それは公害です。

富山の神通川上流の鉱山から排出されたカドミウムにより汚染された川水や農地に実った米などを通じて多くの人々が苦しめられたのがイタイタイ病です。富山では小学校での授業だけでなく資料館を訪れたりしてこの病について詳しく学びました。

熊本にも同じく水の汚染により苦しめられた過去がありました。水俣病です。これは、チソン工場から海に流れ出たメチル水銀が海にいる魚や貝などに入り、それを食べるにより引き起こされた病です。

二つの病はいずれも日本の四大公害の一つとなり、経済成長と引きか

えに大きな犠牲を払った教訓として二度と同じ過ちを繰り返すことのないよう語り継がれています。

私は富山で忘れられない水の風景があります。それは黒部ダムです。日本の急速な経済復興に伴う関西の深刻な電力不足解消のため造られた黒部ダムは、その建造を大量の水と土砂に苦しめられ、七年の歳月、延べ一千万人の人手そして一七一名の犠牲により完成しました。その歴史を知った上で訪れた黒部ダムを自分の目で見たとき、私はその壮大な姿に圧倒されました。ダムの放水は日本一の落差で、落水からあがるひんやりした水煙とゴーツというお腹に響くような音に包まれます。六十年代前、多くの苦勞と犠牲を強いた水は今、人々の生活を支え、日本を代表する観光スポットとなり、感動を与える存在となっています。そしてこの黒部ダムの風景は私にとって忘れられないふるさと富山の思い出として心にずっと刻まれています。

きっと日本全国、どこでも私たち人間と水にまつわる歴史・物語があって、昔から人間はそれぞれのふるさとで工夫し、苦勞し、水と共に生きてきたのです。ふるさとの水の歴史を学ぶことはふるさとそのものを知ることになるのだと思います。

これから私はここ熊本の水について学び、熊本の素晴らしい水の風景を見ていきたいと思います。わたしのふるさととなる熊本についてもっと知りたいと思います。そして先人たちが作りあげた水の水物語を守り、また未来に語り継いでいかなくはなりません。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

水の二面性

佐賀県

佐賀大学教育学部附属中学校

二年

北村 竜清

六月二十八日、朝から大雨が降り続いていた。家の裏にあるクリークの水があふれて、畑に浸水しそうになっていた。夕方、両親の帰りが遅くて心配していた。やっと帰宅した母が、こう言った。

「あちらこちらで冠水していて、自動車の中まで水が入りそうで、怖かった。家に帰れなかったらどうしようかと思っていたよ。」

しばらくして父も帰宅し、僕は安心した。テレビをつけると、大雨・洪水特別警報が発令され、隣町には、避難指示が出ていた。その晩、不安でなかなか寝付けなかった。

その後、連日のように西日本を中心とした各地での大雨の被害が報道されていた。気象庁は、この大雨を「平成三十年七月豪雨」と命名したそうだ。その被害の状況は、総務省消防庁によると、七月三十一日現在、死者二百二十人、行方不明者十人、全壊の住宅五千二百三十六棟、半壊の住宅五千七百九十棟などであり、「平成最悪の水害」と報道するニュース番組もあった。僕にとっても、水の脅威をこんなに身近に感じた経験は初めてだった。

一方で、水は人にとって必要不可欠なものである。飲料水、料理、風呂、トイレなど、あらゆる生活の場面で水を使っている。

そして今年の夏、僕は新たな水の使い方を学ぶことができた。

僕は先日、佐賀市の交流事業で沖縄県の久米島に行った。久米島の中学一年生と一緒に浜に行ったが、海の底が見え、魚の泳いでいる様子も観察できるほど不純物が少なく、透明度の高い海水だった。そんなにきれいな海に入ったのは初めてだった。あるテレビ番組で日本一美しい海として紹介されていたのも、納得だ。そんな美しい久米島の海水を利用した「海洋温度差発電」という新しい水の使い方を、僕は初めて知った。

この発電は、水深二百メートル以下の海洋深層水と、浅い所の海水の

温度差を利用したものだ。久米島では、水深六百十二メートルあたりのところから汲み上げられた海洋深層水を使っており、汲み上げ量が突出して日本一である。世界では、ハワイに次いで二位だ。発電に使った海水は、まだ十分に冷たいので、その冷たさを利用してクルマエビや海ブドウ、野菜を作ったり、冷房に使ったりすることができるとだ。また、きれいさを利用して、飲み水や化粧品を作るなど、いろいろなことに利用できる、それを「複合利用」と呼ぶそうだ。

そして、何と、この海洋温度差発電の研究・開発に携わっているのが、僕の地元、佐賀県にある佐賀大学海洋エネルギー研究センターだということを知り、僕はこの佐賀県をほこりに思い、久米島から帰ってきた。

僕にとってこの夏は、水の脅威と水の便利さという水の二面性を経験する貴重なものであった。僕は、今の当たり前前に送ることができる生活に日々感謝しながら、水と共に生きていこうと思う。そのために、僕は何かできるだろうか。まずは、大雨・洪水に備え、佐賀市の内水ハザードマップを見て、どこが危険でどこが安全なのか理解し、家族で避難する場所を決めることから始めたい。そして、日頃からシャワーや蛇口の水の出しっ放しをなくしたり、歯みがきで口をすすぐ時のコップに入れる水を最小限に抑えたりして節水をしたい。

さらに、今まだ研究段階の海洋温度差発電についてもっと調べて、調べたことをたくさんの人に伝えたい。この発電に興味をもつ人が出てくると、研究者・開発者が増え、現在二百五十家族分の発電がさらに増えるだろう。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水という存在

インドネシア共和国 ジャカルタ日本人学校 二年 木下 結花

私は生まれてから日本を離れて、海外で過ごし、今はインドネシアで暮らしています。日本には年に数回帰りますが、私は日本に帰るときに色々なところで日本の素晴らしさを感じます。

その中でも特に私が「日本ってすごい」と感じるのは、水を自由に使えるということです。どういうことかというと、水道の蛇口をひねっただけできれいな水が出てきてそれを飲むことができたり、料理に使ったりできることです。日本でずっと暮らしている人にとってはそれが当たり前で、日常なのかもしれません。ですが、私が今暮らしているインドネシアでは絶対にありえないことです。なぜなら私は小さい頃から、「水道から出てきた水は飲むではいけない。もし飲むのなら、ペットボトルの水を飲みなさい。」と、教えられてきたからです。私にとってはこれが日常なのです。だから、日本に帰ってきて祖母が料理に水道水を使ったり、いとこが水道水を飲んでいるのを見て驚きました。

また、私の祖父は畑をもっています。私が畑に手伝いに行ったときに、祖父は近くにある湧き水を野菜にあげていました。私はジョーロやバケツに水をくんだときに、湧き水がとてもきれいだったのを覚えていました。その湧き水には、ザリガニや魚がいました。そして、その湧き水で手を洗ったり、野菜を洗って食べたりました。私にとっては信じられないことばかりです。インドネシアの川は、臭いし濁っています。だから、とてもじゃないけどそこで手を洗ったり、ましてその水で洗った野菜を食べるなんて考えられません。

私はこんな風に日本の水の当たり前とインドネシアの水の当たり前の違いを実感するたびに、インドネシアでも日本のように自由に水を使う事ができたなら、今よりもずっと便利で楽しい生活待っていると思います。

では、どうしたら私が暮らしているインドネシアでも水を自由に使える

ようになるのでしょうか。私はインドネシアと日本では自然を美しく保つという事に対して意識の差があると思います。自然を美しく保つという事が最終的には美しい水を保つという事につながっているのだと思います。日本では道端や、山や川でもいたるところでポイ捨て禁止という看板をよく目にします。また、捨てられていけばボランティアの人々がきれいに保つためにゴミ拾いをしているのをテレビなどで見て、日本ではゴミを捨てないのはもちろんだけれど、捨てられていけばそのまま放置しておかずに自発的に行動に移すことが出来る人が多くいるということに感動しました。

私は日本のように社会全体で自然を美しく保とうとする動きがインドネシアに限らず、世界中で広まっていければ良いと思います。

海外で過ごし、水を自由に使えない不便さを知っている私だからこそ、自分から進んで環境保護に貢献できるような人間になりたいと強く思います。まずは自分から、自然にゴミを捨てたり自然を破壊したりしないことは当たり前ですが、ボランティアに参加したり、植林活動に参加するなどの地域活動だけでなく、食べ残しをしない、エコバックで買い物をする、リサイクル品を使用するといった個人の活動も無限にあると思います。

私ひとりの活動では大きな変化は生まれませんが、まずはインドネシアのジャカルタ日本人学校でこの考えを一人でも多くの人達に理解してもらえる様にしたいです。そしてその考えが世界中に広まり、ひとつでも多くの国や地域で美しい水を自由に使えるようになれば良いと思います。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

人災を封じ災害を防ぐ

愛知県 扶桑町立扶桑中学校 二年 真野 聡真

ある日、ふとテレビを見たら、愛知県知多市にある佐布里池のトップックスが放送されていた。その内容は驚くべきものだった。なんと、大きな調整池の水を全て抜くというもの。私はその番組を見て一体どういう意味なのかと好奇心に後押しされてすぐに佐布里池を訪れた。到着するやいなや、池の水位が低くなっていることに気がついた。写真と比べるとその差は歴然である。池のほとりを歩いていると、一つ疑問が浮かんで来た。

「何故この広大な池の水を抜くのか」

近くにある資料館の職員の方に尋ねると、どうやら堤体の補強工事の為だという。又、その資料館には、愛知用水の建設に関わり佐布里池の建設にも携わった男性が来館されており、その方曰く、

「元々この場所は池の建設に適しておらず、避けるべきだと言ったが、そのまま工事が進んでいった」

という。自然災害が急増している昨今、耐震性や強度を見直し、池周辺や下流の人々が安全に暮らす為に改良を続けていかなければならない。又これらは池やダムだけではなく、街の施設や各家庭でも重要なことであると感した。

そんなことを思っている矢先に、私は驚愕のニュースを目にした。ブラジル南東部のミナスジェライス州の鉱山用ダムが決壊し、死者・行方不明者あわせて三百五十人を超える痛ましい事件だ。これは、地震や豪雨などの自然災害によるものではない。管理会社が決壊の危険があることを知りながら対応をしなかったという。又、決壊時に周囲に避難を促すサイレンも、一切作動しなかったという。防ぐこともできたであろうこの事件によって多くの尊い命が奪われ、老若男女の夢が瞬く間に消し去られたことに、憤りを感じた。この事例と前述の佐布里池を照らし合わせると、佐布里池の補強工事がいかに重要であるかが手に取る様に分

かる。私はこの事件を教訓として、一刻も早く世界各国で同状況のダムやため池の整備がされ、「人災」によって失われる命を一人でも多く守ることの取組がなされることを切に願う。

「人災」は防ぐことはできても、「自然災害」は、完全に防ぐことは困難である。だが、それに備えることはできる。二年前、九州北部豪雨が発生した。連日メディアで放送される映像は普段私達があらゆる所で使っている水が突然と姿を変え、容赦なく街を襲い人々を飲み込む化物へと豹変したのだ。そんな中、福岡県朝倉市にある寺内ダムは洪水を貯水し大量の土砂や流木が下流への流出を防ぎ、被害の拡大を食い止めた。これは、備えが功を奏し、多くの命を救ったのだ。しかし翌年、台風七号によって起きた、西日本豪雨では、愛媛県西予市などのダムで、想定を遥かに上回る雨量により安全基準の六倍という異例の洪水が下流へ流された。又、住民への避難を促すスピーカーが異常な降雨の為聞こえなかったという。これらにより、九人の命が奪われた。ダムは、あらゆる「想定外」を考慮し、建設されているが、今回その想定を上回る雨量により人々の命を奪う事態となった。今回を教訓とし、様々な事態に対応するキャパシティを広げ、同じことを繰り返さない様に次代に引き継いでほしいと感じる。

前述の如く、私達が生きる為に必要であり、日々当たり前のように使っている水は、時として、人の命を瞬く間に奪う。そんな水がもたらす水害に対応する為、私達ができることは、水について知ること。いつ起きるか分からない災害に各家庭で万全の備えをし、様々な想定で家庭や友人と話し合う。このような一人一人の意識によって、自然災害が無くなること、災害が起きた時に多くの人が救われることを、心より願う。

中央審査会特別賞（優秀賞）

水と共に生きる

岩手県 陸前高田市立高田第一中学校 二年 小野寺 麻緒

あの日、私は初めて水の怖さを知った。東日本大震災が起きたのは、今から八年前。当時、私は五歳だったが、その時のことは、今でも鮮やかに覚えている。

私はあの時、中学校の体育館に避難した。避難所で一番先に配られたのは紙コップ半分の水。ほんのわずかな量であったが、嬉しかった。しかし、水は不足し、トイレの水は流れず、お風呂に入ることなんて考えられない日々であった。私は、「海なんて無くなればいい、津波なんて来なければよかったのに」と何度も思った。地震は、私たちの大切な街を、人々の笑顔を、そして、たくさんの思い出を奪っていった。私は幼いながらも本当の悲しみを感じた。

数日して私たち家族は、山沿いにある祖父母の家に避難した。そこで、私は陽の光を集めてキラキラ光る沢の水にはっとして思わず息をのんだ。私はいてもたつてもいられず、一目散に走って行き、水をすくうと一気に飲んだ。ゴクゴクと音を立て、冷たい水は私の喉を流れていった。味のしない水がこんなにもおいしいなんて思ってもみないことだった。

小学生になると、私は体育の授業が不安だった。水が怖くて、プールに入るのがとても嫌だったのだ。「おぼれたらどうしよう、沈んでしまつたらどうしよう。」といつも考えてしまっていた。けれども、プールの水面に映る輝きは、あの山の沢のきらめきにも似ていて、喉の渇きをうるおした水の記憶と重なり、私の恐怖心は徐々に薄れていった。

海が嫌いで、海なんかなくなればいいと思っていた私だったが、中学生になると次第に私の気持ちは変化し、「この海とともに生きていくためにはどうしていったらいいのだろう」と考え始めていたのだった。そんな時、父から「防災についてもっと知りたくないか」と誘われ、市で行われている『防災マイスター養成講座』に父と姉との三人で通うことになった。たくさんの大人に交じって話を聞くことは少し難しかったが、

洪水や土砂崩れなど水害の学習や避難生活の食事、地域での避難訓練の大切さなどを改めて学ぶことができた。十二講座の中でも特に、靴の代わりに新聞紙でスリッパを作ることや火を使わずに水だけで調理ができる食品のことがとても印象に残った。災害から身を守るための知識がないと、自分を守れないことも初めて知った。最後にテストを終えて、私はマイスターの認定を受けることができた。そして、その学びを同じ学年の仲間の前で発表する機会に恵まれ、避難所運営に役立つ情報を伝えることもできた。災害時に長持ちする食品や賞味期限の優先順位をつけるというローリングストックの話をみんなはとても興味深く聞いてくれて、私もみんなの役に立てたことがとても嬉しかった。

人間の命を支える水は、時として、人の命も奪ってしまう怖いものにもなる。しかし、震災を経験した私たちにとって水はかけがえのない大切なものだ。

私は、水に囲まれたこの街が好きだ。好きだからこそ、海を怖がらず、水を怖がらず、次の世代にもこの街を好きになってほしいと願う。どんなに月日が過ぎても震災の悲しさや辛さは決して消えることはないけれど、私はこの街の復興を思い、これからの人達に防災活動を通して、水の怖さも豊かさも同時に伝えていきたい。そして、あのコップ一杯の水を差し出せる人になりたい。

キラキラとした故郷の水の美しさ。水を守り、街を守っていくことがこれからの私のできることだと思う。

入選

水を受け渡す

北海道 長沼町立長沼中学校 三年 田近 峰々

私の住む長沼町。北海道だけに冬はやはり気温が低い。だが、町民の心はみな温かい。「いいから、いいから。」と笑いながら、みんながみんなを助け合ってきた。そんな長沼町は、二年前に開基百三十年を迎えた。それを記念し、開村、開墾の演劇「大地の侍―吉川鉄之助翁物語」が公演された。そこで私は、初めて長沼町の驚きの歴史、「水との戦い」を知ることになった。

長沼町は、二つの大きな川に挟まれている。さらには、低い土地が多いため、開墾当初から頻繁に水害に見舞われてきた。その数は、七十回以上。毎年のように起こる水害が、作物や家、そして人命までを奪っていったのだ。十数年もの歳月を費やして、川の流れを変える大工事が行われ、併せて堤防や排水施設が造られた。ようやく水害を防ぐことに成功したのだった。

長沼の水との戦いは、水害だけに終わるものではなかった。生活用水の確保にも、相当な苦労があったのだ。市街地など低い土地に住む人たちは、生活用水として川の水を使ったらしい。川から水を運んでくるのがまず大仕事。そのうえ、水の汚れがひどいため、一度濾して使わなければならなかった。昭和二十八年に上水道ができたが、長沼町全域にきれいな水が行き渡るようになったのは、昭和四十三年のことだったという。

多くの苦労をものともせず、困難に立ち向かい、支え合いながらすばらしい町を築いてきた長沼の先人たち。それは「水との戦い」の歴史だったのだ。今の私たちの生活があるのも、こうした先人たちのおかげなのだ。

でも私は、そんな先人たちの苦労を全く知らずに生活してきた。だから、水に関心をもったこともなかった。「蛇口をひねれば水が出る。」それは当たり前前の感覚だった。水を出しっ放しにしても何も感じなかった。

こんな感覚のままでもいいのだろうか。先人たちの「水との戦い」の歴史は、別に知らなくてもいいものなのだろうか。

そんなはずはない。現に日本の水の資源は、年々減少しているにもかかわらず、水の使用量は逆に年々増加しているという。このままだと深刻な水不足になってしまうのは明らかだ。そうなるからでは手遅れだ。水がなければ人は生活できないし、生きていくこともできない。そんな状況を、先人たちが望んでいたわけがない。

先人たちの「水との戦い」は、今の私たちが水に無関心になり、贅沢な水の使い方をしてほしかったからでは決してない。長沼に生きる人々の暮らしに、水が不可欠で大切なものだから、苦勞してまでも水と戦い、水を治めてきたのだ。

だから、今すぐに節水など水を大切にしていかなければならない。手洗い、洗顔、シャワーのときは、水の出しっ放しは厳禁だ。水を出したままにすると一分間に十二リットルもの水を消費するという。また、排水にも気を使うべきだ。コップ一杯の油を下水に流すだけで、それを浄化するために六十トンもの水が必要になる。また、水質汚染が進めば、水を飲めなくなる恐れだ。先人たちが守ってきた水を、今度は今の私たちが守っていく番なのだ。

蛇口を開けるたびに水が出る。先人たちの思いがこもった歴史ある水だということいつも心に刻み、大切に使っていきたい。今ある貴重な水、水の戦いから生まれてきた人々の温かい心、これらを守り、それを後世に遺していくのは、私たちがでしかないのだ。だから、長沼の開祖、吉川鉄之助から始まる先人たちからの水への思いを受け継ぎ、未来の人たちへとその思いを受け渡していくこと、さらには、長沼から北海道へ、日本へ、世界へと水への思いを広めていくこと、それが今の私たちの使命だと思っている。

入選

小さな行動大きな結果

青森県 八戸市立是川中学校 二年 工藤 小陽

私は、川が好きだ。山を勢いよく流れていく川の「ゴーツ」という音を聞くと、体が軽くなる気がする。今、自分が持つ悩みなど、小さなことでしかないと感じるのだ。

それだけではない。川は、生物の暮らしに欠かせないものだ。農業や工業、そして普段の生活などで、人間は川の水を使っている。また、川が流れていることで、水源がない地域にも水がいきわたり、植物や生物が繁栄している。もしも、全ての水に流れがなかったら、水源のない地域は植物が育たず、生物もいない不毛の土地になってしまう。

川は私達の生活になくってはならないものだが、だからこそ、人類が汚してしまったという一面も持っている。日本国内でも、汚染された川の数は、数えたらきりが無い。

例えば、高度経済成長期の富山県。そこを流れる神通川の下流域。鉱山の排水の処理をせずに汚水を川に流したため、川が汚染された。その水が巡り巡って人間に被害をもたらした。その水を使った人々はイタイ病を発症した。また、汚染された水は農業にも使用されていたため、その農地の土壌も汚染された。この公害は大正時代から確認されていた。それにも関わらず、原因となったカドミウムの水や土に含まれる濃度が国の定める基準を下回ったのは、平成に入ってからだ。

他にも、新潟水俣病を引き起こした、新潟県にある阿賀野川の工場の排水による水質汚濁など、たくさん川の川が汚染された。

川を汚染するのは、工場の排水だけではない。生活排水がそのまま流されたため、洗剤がたまり、生き物がたくさん死んでしまった川もたくさんある。

現在は污水处理場が整備され、汚水を処理してから川に流している。そのため、こうした目に見える水質汚濁は減ってきた。しかし、だからといって水を汚していいわけではない。水は汚せば汚すほど、それを綺

麗にするためにたくさん薬品が必要になる。その薬品が水に住む生物や水辺の植物に、悪影響を及ぼさないとはいえ切れない。

そこで、これからは、「いかに生活の中で水を汚さないか」が大切になる。

例えば、食事のときに使う食器の量を最小限に抑えてみてはどうだろうか。食事で使った食器の量が少なければ、使う洗剤の量も少なくて済む。そのため、水をあまり汚さないことにつながる。

また、ごみは外に捨てずに、自分で処分することもできるだろう。もし、ごみを外に捨ててしまったら、その場所がどんなに川から離れようと、風で飛ばされて水に入ってしまうかもしれない。ごみを外に捨てないことは、町の衛生を守るだけではなく、川を汚さないためにも大切なことなのだ。

他にも、私たちにできることは、日常のなかに、両の手の指では余るほどたくさんある。

私たちが流してしまった川の汚れは、すこしずつたまり、植物や生物、人間に大きな被害を与えた。その被害には、「このくらい」という人間の考えの甘さが潜んでいる気がする。

人間の「このくらい」が積み重なった被害は、何と形容すればいいのか分からないほど大きかった。それならば、人間が「少しでも」と考え水を汚さなければ、その成果も大きいはずだ。

私は、川が好きだ。私の好きな川が、百年後、二百年後も今の迫力のある川でいてほしい。そして、その時代を生きる人々に、川のもつ美しさやパワーを感じ取ってほしい。だから私は、普段の生活の中で、どんなに小さなことでも、水を大切に作る工夫をしていきたい。それがきっと、この地球の川を、今と同じくらい、そして今よりももっと、素晴らしいものにつながるはずだ。

入選

雨の秘めた可能性

青森県 八戸市立是川中学校 二年 林 かれん

私の学校にはエコをこころがけている家庭科の先生がいました。調理実習で使った野菜の皮を集めて乾燥させ土にかえしたり、お皿を洗うとき極力洗剤を使わないようにしたりする先生でした。

ある日、雨が降りそうになると、先生に、

「林さん、ひまだったらバケツを体育館の屋根の下に並べて置いておいてくれないか。」

と、頼まれました。何をしようかと思っていたらポツポツと雨が降ってきました。急いでバケツを並べて玄関に戻ると、雨水をためているのだよと言われました。

翌朝学校に登校すると、バケツにはたっぷり水が入っていました。何に使うのだろうと新たな疑問がかびました。すると、先生がやって来て、空のバケツに半分くらい雨水を移しかえていました。

「何に使うんですか？」

と聞くと、

「雨水を再利用してそうじに使っているよ。」と教えてくれました。私はとても驚きました。私はその先生が担当している教室を掃除していましたが、水ぶきで使っていた水が雨水だったことを初めて知りました。

他にも先生は玄関のモップがけや、バケツにためて使った掃除の水を植物へあげているということを教えてくれました。私は、最初雨水を使うことをちょっと嫌だと思っていました。けれど植物は雨水を使って生活しているから再利用できるのではないかと思うようになりました。先生が前に話していた極力洗剤を使わないということも、自然環境や水の資源を大切にしているのだなと感じました。

その日からエコや資源について考えるようになりました。家の掃除でもなるべくバケツにためて使ったり、風呂の残ったお湯で湯船の掃除に使ったりなど工夫もできるようになりました。しかし、いくら水道の水

をエコに使ったとしても雨水をほかに再利用することができないのかと考えました。でも、人間がそのまま雨水を飲むことはできません。家庭菜園や盆栽にあげることが今の私にできることなのかなと感じました。

私はいままで雨は暗い、じめじめしているなどのイメージしかありませんでした。でも、家庭科の先生に会って、雨や雨水は再利用することができる大切な資源なのだということが分かりました。その先生が大切にしていたことは、雨などの自然のものを極力洗剤を使わずに利用して、土に戻すことや自然を生かしてリサイクルすることです。先生は私たちが無理のない範囲で生活の中に物を大切にすることを教えてくれました。雨水を利用する、ふろの残り湯を再利用するなどのシステムが整うと水資源の節約になり、たくさんの人に受け入れられていくと思います。

私は、これからいろんな機会に、雨をみたとときにリサイクルと関連づけることが多くなると思います。そこからたくさんアイデアが一つでも形になったらおもしろいと思います。

私は理科が大好きです。だから雨を一つの大きな実験材料としてとらえていきたいいなと感じます。雨水は海の水が蒸発して上に上がり雲になります。その雲が大きくなると雨が降ります。雨は雪にもひょうにもなります。私は、そんなたくさん可能性を秘めた雨水を研究したいです。

入選

水がうみ出すもの

私たちが普段、当たり前のように使っている水。蛇口をひねれば必ずといっていいほど水が流れ出てきます。そんな水ですが、海外の国に行くと、汚染されて、茶色く濁った水を使用せざるを得ない国もそう少なくありません。

例えば、アフリカの国々は、浄水場などの水をきれいにする場所を建設するお金がなく、川や、雨が降ったあとにできる水たまりの水などを、そのまま使っています。その水が不衛生なのは、誰の目から見ても明らかです。自分も、そのような水はあまり口にしたくないし、その水を使って、料理や洗濯などの家事作業を行うのも、決してたくありません。アフリカの人々は、そのようなことも我慢しながら、日々の苦しい生活を耐えているのです。

しかしここ数年の間に、日本がアフリカの貧しい国々にかんがい施設や浄水場を建設するなど、水をきれいにする取り組みが始まっているところもあります。そのおかげもあってか、アフリカのその国の死亡率は、減少してきているそうです。水というのは、人間をはじめとする動物の生死を左右する、とても大事なもののなのです。

また、水は、地域を活性化させるための観光資源にもなります。

自分は、小学校6年生の頃に、某新聞社が企画をしている「こども新聞」というものに参加しました。これは、自分が新聞記者になって、自分の好きな記事を一枚書くことができる、という企画です。その記事の内容を何にしようか迷っていた時に、

「ここ大湊地区は湧き水が多くて、しかもその水はとても美味しいから、その事について記事を書いて、大湊の湧き水をもっとたくさんの人に知ってもらえば良いと思うよ。」

という親の助言もあり、自分もこの美味しい湧き水をたくさんの人に知ってほしい、と思いました。そこで、自分は大湊の湧き水を所有して

青森県 むつ市立大湊中学校 三年 辻 啓生

る自治体、団体の中でも、ペットボトルに湧き水を入れた商品を販売している業者にお話を伺いました。その話を聞いていた中で、その担当者の方は、

「湧き水をペットボトルで売り出したことによって、この土地の湧き水が知られ、地域の活性化につながった。」

と話していました。この話を聞いて、自分は湧き水が観光資源になることに驚きました。さらに、この取材を通してわかったことがあります。それは、水は循環する、ということ。水が川になり、海に流れ、また雨になって降り注ぐように、湧き水をペットボトルに入れて売り出し、それを買う人が出てきて、またそれが飲みたくなり、現地に行ってみたり、また製造されたものを買うようになる。水には人との繋がりを深め、それを循環させていく働きもあるのです。

水には、地域を活性化させる力、人と人の繋がりを深める力、さらに人の生死を分ける力があります。この大事な水が無駄に使うことなく、水への見方を変えて水を使っていきたいです。限りある水を生かし続けるために。

入選

クニマスと水

福島県 西郷村立西郷第二中学校 三年 佐藤 壮真

中学一年の秋、僕は、国語の教科書の説明文の一つである「幻の魚は生きていた」を読んだ。この文章は、田沢湖で絶滅したクニマスが、遠く離れた西湖で生きていたという話だ。これを読んだ日から、僕の水に対する考えは大きく変化した。

かつてクニマスは、田沢湖で元気に生息していた。しかし、田沢湖一帯では、大きな川が少なく、唯一近くを流れて水量のある玉川は、強い酸性で農業用水としては使えない。そんな中、東北地方を大凶作が襲う。田沢湖周辺の人々にとっては、農業用水の確保がとても重要な課題になった。そこで人々は、玉川の水を田沢湖に引き入れて酸性を弱め、それを農業用水として利用することを計画した。もちろん酸性の玉川の水を引き入れることは、田沢湖に生息する生物たちに打撃を与えかねない。しかし人々は、田沢湖の環境よりも自分たちの生活の方が大事だと考え、その計画を実行してしまった。結果、田沢湖のクニマスは絶滅した。

僕は、「確かにクニマスはかわいそうだが、そこに生活していた人々は、生きるために水を引き入れたのだから仕方がないのではないか」と思った。しかし、その後の筆者の考えを見て、僕の考えは変わった。筆者は、クニマスが生き続けるためには、クニマスだけを過度に保護するのではなく、他の生き物と、それらの生き物から生活のかたを得ている人間とがバランスを保って共存し、人と生き物とがつながりあった関係を維持することが必要だと考えていた。僕はこれを聞いて、なるほど、と思った。田沢湖の人々は、「農業用水さえ確保できればよい」と自分たち人間のことしか頭に入っていなかった。しかし、本当はもっと考えるべきだったのではないか。田沢湖の水質を保ち、クニマスを守る方法があったのではないか。田沢湖に住む生物の環境を守りつつ農業用水を得る方法があったのではないか。もちろん人間の生活も大事だ。しかし、それと同じくらい他の生物、そして未来の環境のことも大事にしなければなら

ないのだと筆者は考えていたのだ。

田沢湖で絶滅したはずのクニマスは、絶滅したと思われた七十年後に、クニマス漁の人が卵を移植したことによって、遠く離れた山梨県の西湖で脈々と命をつないでいたことが分かった。

そして今、そのクニマスの田沢湖への「里帰り」が検討されている。しかし、田沢湖の水質はまだ酸性で容易に「里帰り」ができるわけではない。環境を変えてしまうのは一瞬だが、それを元に戻すのには長い時間と労力が必要になってくる。田沢湖の水質が良くならなければ、クニマスを知る人々の願いは叶わぬままなのだ。

そのように考えてみると、やはり「水」というのは世の中の多くの物事に関わっているのだと考えさせられた。蛇口をひねると出てきて、生活用水、そして大切な飲料として活躍する僕たちが知っている恵みの水。大雪や豪雨、津波などによって私たちに被害をもたらすのも水。そして、クニマスや様々な生き物の生死を決める運命の水。様々な場所に、様々な形や状態で姿を現す水は、すべての生き物の運命を分ける重要なものだといえる。

現代を生きる私たちは、「今」のことだけでなく、未来の地球や人間以外の生き物の環境にも配慮しながら生活していかなければならない。この地球にあふれる水のおかげでこれまで文明を築くことができた私たち人間は、水の恵みに感謝して水を大切にし、今と未来を生きるすべての生き物を代表して守っていかなければならない。クニマスを通して、将来の水との向き合い方について深く考えさせられた。未来のために、僕は水を将来の地球にいい状態で回してあげたいと思う。

入選

ホタルの光

茨城県 土浦日本大学中等教育学校 一年 網永 莉々

「去年は放流した三百匹のホタルの幼虫の内、四匹を成虫として確認できました。」

そう嬉しそうに語る「ビオトープを守る会」会長さんの言葉と笑顔は、未だに私の記憶に鮮明に残っている。

一昨年の夏。私は自由研究のテーマを近くのビオトープにする事にした。幼い頃からザリガニ釣りに行き、昆虫やメダカ、沢山の動植物に親しんできた。小学校でも田植えや稲刈りを経験させてもらい、ビオトープについて興味をわいていた。

私の突然の取材を、快く引き受けて下さった「ビオトープを守る会」の会長さんから、ビオトープの大切さに改めて気づかされた。また、今の日本の現状を知ることにもなった。

ビオトープでは無農薬での米の栽培を行っている。田の水はとてきれいで、田植えの際にはタニシ、蝶、イナゴなど様々な生き物を見る事が出来た。しかし、私は疑問を持った。「なぜ、ビオトープでしか見ることがない生き物がいるのだろう。」その答えは会長さんの話の中にあっただ。

「他の田んぼは農薬で生き物が住むことの出来ない水が張ってあるんです。」

本来、田の生き物は食物連鎖が出来ている。ところが、人間は米の収穫量を増やすために虫たちを農薬で駆除する。農薬という毒で水田を汚してしまった。生き物は死に絶え、生命の営みの鎖は途切れてしまったのだ。

水の汚染のために地上から姿を消してしまつた種がいる。今や佐渡にしかないトキは、江戸時代、十萬羽を超え、日本の空を朱色に染めた。しかしながら、平成七年にはたった一羽が残されるのみとなった。このトキは命がつきるまでゲージに入れられていた。狭いゲージの中で、トキたちは再び空を飛び回ることを夢見ていただろう。農薬が多く含まれ

た水で育つた汚染されたドジョウをトキが食べることで、トキの体は段々と蝕まれていく。水質汚染は、乱獲で数の減つたトキたちに追い打ちをかけた。日本のトキは絶滅した。

水質汚染の原因は農薬だけではない。ごみの投棄や、生活排水が水を汚す。逆に言えば、私達は取り組み次第で水をきれいにすることが出来るのだ。私にできることは何だろう？捨てられたゴミが目についたら拾う。拾い続ける。ゴミが、川やビオトープの水の中に入ることを少しでも防ぐ。食事をした後の皿を、屑紙等で拭き取ってから洗えば、洗剤が減る。生涯これ続ける。そしてこの小さな行動を他者にも波紋のように広げていく。そうすれば生態系の破壊を止めることが出来るかもしれない。今、一年間に絶滅する動物は四万種と言われている。この四万種を私達は救わなくてはいけない。水を綺麗にする事で、レッドデータブックに載つた多くの動物が救われるはずだ。

過去、私達人間はより便利で暮らしやすいことを理想に掲げ発展してきた。しかし、私達の発展により多くの命が地球上から姿を消した。動物たちが死に絶えた地球で、人間だけが生き残れるのだろうか？未来に私達が理想とすべきなのは、一本も雑草の生えない農地ではなく、沢山の生き物がひしめき合う田。科学で生き物を殺すのではなく、科学で生き物と人間が共存する社会なのではないか。

「ビオトープを守る会」の会長さんの笑顔の意味。それは、たった四千四百平方メートルのビオトープの中で、人の手助けにより理想の生態系が作られ、自然に命の循環が構築されたから。豊かな水と、ホタルや他の生き物が暮らしている環境が整つたからだ。これは、環境がどうしようもなく破壊されてしまった現在でも、私達が努力することで自然の力が蘇るのだと証明してくれているのだと思う。わずか四匹のホタルが、私達に教えてくれた希望。私は希望を守りたい。

入選

水から学んだこと

栃木県 佐野日本大学中等教育学校 三年 澤井 優実

私は以前、水について書かれた本を読んだことがある。その本を読んでも、水の問題とは多種にわたり、かつ身近なものだと感じた。その中でも次の三つのが印象に残っている。

まず、二〇一五年と二〇一六年のグローバルリスク報告書で「潜在的な影響が最も大きいと懸念されるグローバルリスクは水危機である」と発表されていたことだ。それまで世界的な危機という戦争や地球温暖化だと思いついていたので、とても意外だった。水危機には次のような例がある。いつも身近にある水が原因で毎年約三五〇万人が亡くなっている。その中には、私よりも年下の子どもたちが多くいることは信じがたい事実だった。また、二〇一五年には世界の人口の約三分の二が水ストレスに曝されるという想定がある。世界の人口の三分の二という数の多さとその中に私たちが必ずしも入らないとは言いきれない。そう考えると私たちにかかわるといえるので、とても心配になった。

次に、仮想水という考え方である。仮想水とは、食糧を消費する立場の人が、実際にその食料を生産したほどの程度の水が必要かを推定したものである。その例えとして、米一キログラムに約一四〇〇〜三六〇〇リットルの水が必要であるというものがあつた。まさか毎日のように口にする米にこんなに大量の水が必要だとは思わなかつた。それと同時に、私の食事には仮想水を含めどれくらいの水が使われているのかについて興味を持つた。そこで、調べてみると環境省のホームページに仮想水計算機があることを知つた。これを使って計算してみた。すると、ある日の私の夕食に含まれる仮想水は約二〇〇〇リットルにも及んだ。この数字は私の想像を大きく上回っていた。一回の食事にこれ程の水が使われていると知り、驚くとともに水を食べているということを意識しなければならぬと思つた。

この二つのことを知つてから、「節水」だけでなく「水を汚さない」を

心がけるようになった。このように考えるきっかけとしてウォーターフットプリントという考えを知つたことが挙げられる。ウォータープリントとは、ある製品やサービスを製造・提供する過程でどの提訴の水が必要で、その水をどれくらい汚すのかを表すものである。それを知り、今までは節水をすれば環境に優しいと考へていたが、使う水を汚さないように努力することも大切なのだと知り、水を汚さないように自分のできる小さなことから始めたいと思つた。

三つ目は、水や食料・エネルギーを十分に使えない人たちが世界には数多くいるということだ。私たちは蛇口をひねるだけで衛生的な水を飲むことができる。しかし、世界の貧困層から考へるとそれは普通ではないのだ。しかも皮肉なことに、私たちが節水してもあまり意味をなさないというのだ。だから、私たちができることは限られてきてしまう。私たちにできるのは、募金をすること・フェアトレードに協力するなどしかない。私も募金やフェアトレードに積極的に取り組んでいきたいと思う。

水危機や仮想水・衛生的な水が普通ではないことという三つの事実は私に大切なことを教えてくれた。それは、忘れがちになってしまう水への「感謝」の心である。だから、水を飲むときは「ありがとう」と心で言いながら飲みたいと思う。

入選

水の旅

群馬県 群馬県立中央中等教育学校 二年 原 隆太

この春休み、ぼくはニジマスとイワナを釣った。その場で塩焼きにして魚は、何匹でも食べられるのではないかと思うくらい、どれも美味しかった。

この釣り堀の水は、日本名水百選に選ばれている箱島湧水だ。その水をボトルに入れて県外で販売する会社や、この水を料理やコーヒーに使うために汲みに来るお店があるほど、甘くて美味しいと有名な群馬の名水なのだそう。この甘くて美味しい水こそが美味しい魚を育てる秘密なのだ。自分の住む地域にこんな素敵な宝物があることに気を留めていなかったぼくは、もっと詳しくこの湧水のこと、そして生命を支える水のことを知りたいと思った。

地球上で人類が使える水は0.01%だ。日本でも毎年、「水不足で取水制限」というニュースを耳や目にする。しかしその一方で日本では豪雨による川の氾濫が多く、被害が大きいことから、ぼくにはそれほど切実に「貴重な水」「大切な水」という印象がなかった。この印象は、僕の住む環境も大きく影響しているのだろう。

ぼくの生まれる前から続く壮大な計画の八ッ場ダムも、とうとう完成が近づいている。いくつもの集落を移動させ環境を変え、膨大な建設費を掛けて完成させなければならなかったダムの必要性。すでに群馬には多くのダムが存在している。群馬県のホームページによると「群馬県は、利根川の最上流に位置する水源県です。県土の三分の二は森林で、県土のほぼ全域が利根川流域となっています。洪水被害の軽減や、私たちの生活に欠かせない水を確保するために、多くのダムが設置され、下流都県にとっても重要な役割を果たしている」とある。そんな群馬県に住んでいるからこそその水のありがたみという意識の希薄さであったと改めて感じる。

箱島湧水のニジマスがいつも美味しく育つ状態を保っていたのは、森

林の根強さがもたらす貯水力と榛名山の噴火などで出来た何層にも渡る地層による自然ろ過力にある。水質の良さからホテルの生育地でも有名だという。

利根川源流には谷川岳がそびえる。また赤城山や武尊山……と群馬には大小さまざまな水の貯水力がある。

水は、形を変えて地球を旅しているといわれる。源流から海へと流れた水は水蒸気となり、やがて雨として大地に降り落ちる。そして地層にろ過され、再び源流として新たな旅が始まる。その繰り返しの旅だ。

ぼくは、この「生命維持のための水」を出発させる上流域・群馬に住む身として、もっともっと意識しなければならない。そして、生命維持のために活用できるよう、守らなければならないのだと思う。そのために行えることは何か。

それは、多くの源流からの水を「使える水」のまま海へとゴールさせることだと思う。それは、こまめに蛇口の水を止めるとか、油污れの食器を拭き取ってから洗うとか、そんな小さな一人一人の意識の積み重ねなのではないか。「このくらいは大丈夫」みんながそう思ったら、「このくらい」ではなくなる。意識が薄くなりがちな上流・群馬から、美味しいニジマスが育つ湧水のようなきれいで安心な水のまま、できるだけ多く遠くまで送り出し、旅が繰り返されるようにしたい。

入選

水とともに築く未来

群馬県

群馬大学教育学部附属中学校 三年 廣田 佳央

「天狗岩用水」

これは、私が住んでいる町にある用水路だ。私が小さい頃によく家族とサイクリングに行ったこの用水路、多くの自然に囲まれている様子はとても神秘的で、どこまでも続いているかのようだった。あまり目立つ存在ではないが昔から今までとても重要な役割を果たしてきている。

この天狗岩用水には、ある伝説がある。

「昔、総社領主の秋元長友や村人たちが領内に新田をつくっていたがこの工事はとても大変で村人が苦勞している様子を見ていた榛名山の天狗が大きな岩を取り除いてくれた。そして、その天狗のおかげで用水路を完成させられた。」

という伝説だ。この用水路のお陰で領主の秋元氏は領地を拡大したり、地域の経済を発展させたりできたのだという。私はこのことを知ってこの用水路がいかにこの土地にとって重要だったかということを知った。それと同時に私が住んでいる町は「水」という存在があったからこそ成り立つことができたのだと実感した。

天狗岩用水は今でも水力発電としての役割を果たしている。私は今まで天狗岩用水が現在でも利用されているということを知らなかったが、用水路について詳しく調べてみたところ、明治二十七年に一般供給の水力発電所として群馬で初めて、日本で五番目に作られた発電所だということがわかった。私はこのことを知り、幼い時から身近にあった天狗岩用水がこの町のみならず今でも必要な存在なのだと思います。地球温暖化が進んでいる現在、水力発電は再生可能エネルギーの一つとしても重大な役割を果たしていくと思う。

群馬県では当然、天狗岩用水以外にも水力発電を行っている。特に県内ではダムによる発電が多い。ダムには水力発電以外にも役割があるがもしもダムが日本から無くなったらどうなるだろう。きっと今のような

恵まれた自由な生活は出来なくなってしまうと思う。日本は世界的にみて降水量が多いが地形の問題で降った雨などがすぐに海へ流れたり、降水量が多い時期が梅雨や台風シーズンに集中していたりという特徴がある。そのため、降水量が多くても使える水は限られている。ダムではその日に必要な水を一番良いタイミングで流している。だから、日本ではダムは生活していく上で必要不可欠なのだ。

日本では使える水に限りがあるといっても、ひどい水不足が起きているというわけではない。しかし世界では今ひどい水不足が起きている国々がある。調べてみたところ、水不足の原因は人口増加や、気候変動、水紛争など様々だということがわかった。現在、水不足による影響は人々の命だけでなく産業、経済といったものにまで広がっているそうだ。例えば、ある開発途上国の国では子供や女性は水汲みの労働に駆り出されているため就学率が低かったり、女性の社会進出に歯止めがかかったりしているという。日本ではあまり知られていないが世界では、ナイル川やチグリス川などの大きな川の周辺で水をめぐった国同士での水紛争が起きている。私は、今まで自分がどれほど水を自由に使い、水に助けられてきたのかということを感じた。

限りある資源の「水」。この水という存在は私の住む町を発展させただけでなく、私の生活にもつながっていた。今までこんなにも身近にあった水は常に世界の中心であり、世界を支えている。このことを知った今、私はさらに水について学び、これからどのように限りある資源と接していくのかを模索していきたいと思う。そしてこの想いを胸に改めて「天狗岩用水」を訪れたい。

入選

首都圏外郭放水路から水を思う

埼玉県 浦和実業学園中学校 一年 山田 眞子

「埼玉でこんな恐ろしい水害があったなんて。」私は、大掃除の時に偶然見つけた古い新聞の記事に目を疑った。昭和三十三年の台風二十二号による浸水の被害で、腰まで水につかる人々の写真を見たからだ。埼玉に生まれて十二年、私は水害を経験せずに過ごしてきた。だから、私の住む埼玉で過去にこんなに大きな水害が起きていたことに、とても驚いた。しかし、この新聞をきっかけに調べてみると、埼玉での水害は決して過去のものではないことを知った。埼玉には利根川や荒川といった大きな河川が流れており、その流域ではたびたび深刻な水害が起きているのだ。私は水害を防ぐための取り組みを自分の目で確かめたいと思い、埼玉県東部の春日部市にある、首都圏外郭放水路を訪ねてみることにした。

首都圏外郭放水路は、地下約五十m、全長約六・三kmにもわたる世界最大級の地下放水路だ。この辺りは土地が低くて川の勾配も小さく、洪水が起きやすいため、中川などの中小河川からあふれた水を地下に取り込み、大きな江戸川に排出して洪水を防ぐ施設がつけられた。

「広いなあ、まるで神殿のようね。」見学者から口々に言葉がもれる。私が見学したのは、百十六段の階段を地下におりた先にある、「調圧水槽」という部分。高さ約十八mの柱がそびえたつ巨大な空間では、人間が立ちっぱなしに見えてくるほどだ。五百七の柱が五十九本もあるのは、調圧水槽に大量の水が取り込まれた際に、浮力によって水槽が浮いてしまうのを防ぐため。私は、水の力の強大さを感じ、思わず身震いした。水を地下に取り込む「立坑」は五本あり、深さが約七十mもある。スペースシヤトルがすっぽり入る大きさだ。これだけの水量の流入を想定してつくられているのかと、迫力に圧倒された。立坑からトンネルを通り、調圧水槽で水流の勢いを弱めてから、ポンプ装置によって、なんと一秒間に二十五mプール一杯分の量を江戸川に排出することができる。この施

設の完成により、周辺地域の洪水被害は大きく軽減したそうだ。

私の想像をはるかに超えるスケールの施設が、地下から人々の安全と安心を支えている。ここまで巨大で、人間の知恵と技術を最終したもので立ち向かわなければならぬほど、自然の力はとてつもなく大きいことを実感させられるものだった。多くの被害を出した、過去の水害。ときに大切な人の命を奪う水の恐怖。けっして同じ被害を繰り返さないという人々の思い。未来を生きる人々に水害のない町を築こうとする思い。時としてかなわない自然の威力。それでも私たちは水に立ち向かっている。かなければならない。地下放水路は、水害に屈しない決意を私にうたえかけていた。

見学を終えて帰りのバスを待っていると、この地域に住む高齢の男性に声をかけられた。「この施設ができる前は、大雨が降ると堤防の手前にすぐに水がたまってしまいました。そこに家畜の豚や牛が流されてきて、三日ほど水が引かず、豚や牛はそこで腐ってしまってた。随分と心配しましたよ。この施設ができて、本当にありがたいと思います。川は私には恐いだけのものではないですからね。」そう話す男性の視線の先には、田畑が広がり、緑が芽吹き、人々が暮らす美しい景色があった。施設が完成した際に、この男性や地域住民が植樹した木々は、水の恵みを象徴するかのよう、大空へむかい立派に成長している。「今度は、江戸川の河川敷である、大風あげ祭りの時期に来てくださいね。」

男性の朗らかな声に、川への感謝と敬意が込められていると、私には感じられた。

人間が到底およばない力をみせる水への「恐れ」と、私たちにかけてえのない恵みを与えてくれる水への「畏れ」。首都圏外郭放水路は、水への二つの「おそれ」を忘れずに水と共に生きていくことを、私に教えてくれた。

入選

おいしい水は

東京都 新宿区立新宿西戸山中学校 三年 古川 真大

東京の水はまずい。私は小さい頃、父からそう聞いたことがあった。そのこともあり、私には今も東京の水はまずいという偏見がある。私は父の仕事の都合で地方と都会を行き来していて、生まれは香川県だが、今は東京に住んでいる。そして今、東京の蛇口をひねり、水を一口飲んでも、香川の水とおいしさは変わらず、むしろ東京の方がおいしいのではないかと思うほどだ。そこで私は、なぜ東京の水はおいしいのに、まずいという偏見があるのか、気になったので調べた。

すると、東京都に供給される水の八割が水源とされている利根川の流域は、人口密度が高いため、生活排水の流入がそもそも多く、さらにゴミが捨てられたり、工場の排水などが流入するようなこともあるようだ。そのため、人口が少ない田舎の地域の水源に比べると、どうしても水質が良好とは言い難い状況であり、浄水技術が今ほど発達していなかった一九八〇年代くらいまでは、たしかにまずい水だったのだ。しかし、そんな利根川水系の原水を高品質で安全なものにするべく、東京都では、一九九〇年代から都内の浄水場へオゾン及び生物活性炭による「高度浄水処理」の導入を開始し、二〇十三年には全浄水場への導入が完了したそうだ。この「高度浄水処理」はカビ臭原因物質、カルキ臭の原因となるアンモニア態窒素、トリハロメタンのもととなる物質などを処理するためのものであり、「高度浄水処理」の導入によって、カビ臭やカルキ臭といった水をまずくする原因が除かれ、いまや東京都は「高度浄水処理」によって水のおいしさを追求しているといっても過言ではない。ちなみに、国が定めた水質基準は五一項目だが、東京都ではすべてで約二〇〇項目についての水質検査を実施しているそうだ。また、独自の「おいしい水」を提供しているそうだ。「都会の水はまずい」そんなイメージを持つ人は多いだろう。しかし、都会であるからこそ高いレベルの浄水

技術が導入されており、その結果、より「おいしさ」が追及された水道水となっているというのも事実であり、今後も東京の水はどんどんおいしくなっていくと思う。

しかし、日本から世界に視野を広げると、世界では、人口の半数以上が水道を使えるようになった今なお、六億六三〇〇万人もの人々が安心して飲める水が身近になく、池や川、湖、整備されていない井戸などから水を汲んでおり、三三〇万人を超える子どもたちが、水の重さに耐えながら、毎日遠い道のりを歩き続けていて、ようやく水源にたどり着いても、その水は泥や細菌、動物のふん尿などが混じった危険な水であり、その水が原因で、毎日八〇〇人もの子どもが命を落としてしまっているということも事実である。しかし、そんな子ども達の命も募金という手段で、一三六〇万人救っているということも、大きな事実である。

私は、東京とアフリカの2つの水の現状を踏まえて、東京の水を「まずい水」から「おいしい水」に変えることができたことから、アフリカの水を変えることができると思うが、募金は、たくさんの人々の少しづつの気遣いで、達成されるものだから、決して簡単なことではないと思うけれど、まずは自分自身から、そして次は周りの人々とも一緒に、募金活動に協力し、アフリカの水を変える努力をしていきたいと思う。

入選

湧水から学んだこと

神奈川県 聖園女学院中学校 一年 小泉 晶絵

「美味しいお茶を入れよう。」と祖父が連れて行ってくれたのは、「弘法の清水」だった。そこは秦野駅のそばの住宅街にある湧き水で、近くの川にはほとんど水が流れていなかったのに水があふれていた。水を汲みに来ていた人に混じって水を汲んだ。わくわくしながら帰宅して、お湯を沸かし、ひと口飲んでみる。「美味しい！」水道水より滑らかで軽い感じがした。秦野は私の母の故郷だ。遊びに行くといつも水が美味しいと思う。夏は冷たく冬は暖かい気がする。そんな私を祖父が湧き水に誘ってくれた。「弘法の清水」には伝説がある。昔、修行のために全国を歩いていた弘法様がある農家に立ち寄り水を頼んだ。その辺りには水場が無かったので、遠くまで水を汲みに行った娘を見て、弘法様は庭の真ん中に杖を突き立て、そこをクワで掘ると不思議なことに清水が湧き出てきた。そこで、この清水は「弘法の清水」と呼ばれるようになった。「弘法の清水」は全国百名水の秦野盆地湧水群の中で、特に有名な場所だ。弘法大師が生きていた時代の話が水と共に今も残っているなんて驚きだ。お茶の味と歴史の香りを感じる。

しかし、祖父からは意外な話も聞いた。それは、この清水がずっと今のような美味しい水を保ってきたのでは無かったという事だ。一九八九年に、「弘法の清水」は「テトラクロロエチレン」という化学物質に汚染されていることがわかった。「テトラクロロエチレン」は、人工的につくられた化学物質で、燃えにくく油脂をよく溶かすため、クリーニング店のドライクリーニングの洗浄や、工場の生産過程で製品についた油の洗浄剤として使われていて、わずかな量でガンを発生する疑いももたれている。この清水は、水道の水源や、生活用水に使われていたので、大きな問題となった。そこで調査と浄化対策をどのように進めていくか、専門家を集めて地下水汚染対策が始まった。当時は、地下水汚染対策の法律が無かったため条例を定め、調査と浄化対策を行った。汚染物質の除

去を自然に任せただけでは、浄化までに長い時間がかかるので、地下水を吸い上げて汚染物質を除去し、再び地下に戻す装置を開発した。そして、約十五年かけて名水が復活し、去年は名水を入れたボトルドウォーターが、「名水百選」選抜総選挙「おいしさ」部門で第一位となった。一度壊してしまった自然を戻すのは大変な事だが、水をきれいにしたいという住民の強い想いと努力が実って本当に良かったと思う。

秦野は神奈川県唯一の盆地で丹沢山地の南端になる。丹沢山地に降った雨水は浸透して地下水になり、ゆっくりと流れながら湧水群を作る。森林には主に三つの働きがあると習った。水を蓄える事、水をきれいにする事、山崩れを防ぐ事だ。秦野は丹沢の木々の恵みを受けて二十一箇所から清水が湧き出ている。盆地には約三億トン（芦ノ湖の一・五倍）もの地下水があると推定されている。「森林は緑のダムである」という言葉が実感できる。

水が美味しいと、その水を使った料理も美味しくなる。水を利用して作られる酒、そば、うどんなども美味しくなる。きっと、その水を使った農作物の成長にも良い影響があるだろう。人間は、食べ物を一日から二日、食べなくても脂肪で補うことができるが、水分はそうはいかない。人間の体は六割が水分からできているという。良い水を体に取り入れる事は、何よりも大切だ。そのためには、良い水を得られるように森林を守らなければいけないし、知らないうちに水を汚染することが無いように常に気を配らなければならないと思う。これからも水に興味を持って過ごしていきたい。

入選

技術の進歩によって失われるもの

神奈川県 洗足学園中学校 二年 藤井 琴子

水を飲みたいと思った時、まず思い浮かべるのは水道水である。日本ではどこでも、蛇口をひねれば、美味しくて安全な水が飲めることが当たり前である。しかし、最近では健康志向などで、ミネラルウォーターを飲む人も増えている。

天然水の工場見学に行ったことがある。工場見学と聞いていたので、工業団地のようなものを想像していた。しかし、その予想は全く違い、バスが到着したのは森の中だった。動物を探しながら、ハイキングコースのような自然豊かな道を歩いた。森の中にとってもシンプルな建物があり、それが工場であった。そこできれいな水を汲み上げ、安全を確認してから、ボトルに詰めて出荷していた。安全な水を供給するために一番大切なのは、採水する場所の自然環境を守ることであった。私が歩いた道は、安全な水を採水するための森だったのだ。化学物質など汚染物質が土壌に入ってしまうだけで、安全な水の確保は難しくなる。今降った雨が、土壌で濾過されて地下水になるまでに二十年はかかると聞いた。今の自然を守ることは、二十年後の未来の水源を守ることに直結していた。

私たちが水を使わない日はない。それも、きれいな水しか使わない。汚い水は、私たちの健康に害を及ぼすからである。きれいな水は限られているということは皆が知っている。だからこそ、節水などを心がけることは大切だと小さい頃から教育されてきた。

しかし、そのような常識を覆される出来事に遭遇したことがある。中東、アラブ首長国連邦にあるドバイに旅したときのことである。現地はとても気温が高い砂漠地帯だと聞いていた。ところが、中心地には大きな湖のような池が広がっていた。人工的な池で、一日に数回、壮大な噴水が行われているという。百五十メートルもの高さまで上がる噴水がたくさん音楽や光とともにショーを繰り広げていた。近くで見学していた

私は、傘をさしたくなるほど水しぶきを浴びた。その他、ホテルはプールにいつでも入れられるようになっていたり、シャワーの水圧も日本と変わらなかつたり、砂漠地帯とは思えないほど水に関して普通の生活を送っていることを実感した。

現地の方の話だと、地下水はあるようで、主に農業で使われている。飲料水などの生活用水は、近くの海水を淡水化する技術が取り入れられ、それを使っているため、問題ないと言っていた。技術の発展に私は驚いた。淡水化する技術のおかげで、不自由のない生活が送れるようになったのだろう。しかし、私はそのことに不自然さを感じた。海水を淡水化するためには、莫大なエネルギーが使われているはずである。エネルギーを使うということは、何かしらの汚染物質が排出されているだろう。それが、その地だけではなく遠くの森などを汚染し、その水源を壊してしまうことはないのだろうか。海水は無限にあるように見える。それを淡水化すれば水もまた無限であるように見える。しかし、それは本当に無限の資源なのだろうか。本当の安全な水は自然の恵みから得られるということをお忘れてしまつてはいないだろうか。

人はきれいな水がないと生きることができない。安全な水を手に入れるためには、自然を守ることが第一である。水の再利用や浄化方法を高めることも大切だが、水は限りある大切な資源であることを認識することが大事なのである。人間の技術に頼れば無限だと考えるのは、地球の未来にとっては心配なことである。今の自然が与えてくれるのは二十年後の水だ。そのように考えると、地下水も無限ではないのだ。自然が与えてくれる恵みを大切に、節水を心がけた生活を私はしたいと思う。

入選

ホタルの棲む大岡川に

神奈川県 洗足学園中学校 三年 西川 眞由

私の住む町には大岡川という川がある。この川は、横浜市磯子区の水取沢というところが水源だ。かつては運河としての役割を持ち港町である横浜の発展を支えてきた。今でも石積み階段や荷揚場などが残る。

よく、大岡川は汚いと言われる。少し前に比べると水質は改善されてきたものの、いまだにヘドロやごみも多い。生き物の数も決して多いとは言えない。その状態の川を見て、水を飲みたいと思ったことはないし、飲めないだろう。

私の通っていた小学校では、年に一度「ふれあい遠足」という縦割り班で行く全校遠足があった。この遠足では必ず円海山という近くの小さな山へ行く。正確には、その山のうちの「瀬上市民の森」という自然公園だ。円海山には、豊かな自然が残る。山へ一步入るだけで今までの都市的な場所からは想像もつかないような田園風景が広がっている。たくさんのお虫が生息し、数えきれないほどの植物に囲まれ、川のせせらぎが聞こえる。道には石がたくさん転がっており、舗装は一切されていない。山にはいくつもの源流があり、至る所から水が湧き出ている。全て、やがて大岡川へと流れつく水だそう。先生がこの水は飲めると教えてくれたので、水を飲んだ。六年ほど前のことであるが、冷たく、とてもおいしかったことを今でも鮮明に覚えている。また、この森にある瀬上池では、夏になるとホタルを見ることが出来る。昔は見ることできたホタルは、一時期水質の悪化により見られなくなったものの、地域の人々の清掃活動などによって、再び見ることができるようになった大切なホタルである。

水源は飲めるほどきれいな水であるにもかかわらず、大岡川はなぜヘドロがたまってしまったり汚いのか。その原因が私達自身にあるのは明白である。川にレジ袋やペットボトルなどを捨てる人が後を断たないことや排水処理の甘さなどが挙げられるのではないか。それによりごみが

堆積し微生物が増え、ヘドロとなってしまう。

横浜のごみの多さは、ボランティア体験を通し、身をもって学んだ。たった一時間ほどの清掃活動であったにもかかわらず、ペットボトルや缶、煙草の吸い殻、発泡スチロールの箱、布団、衣類等が大量に落ちていた。これでも以前に比べるとかなり減ったほうだという。

また、私は最近問題視されているマイクロプラスチックによる海洋汚染は、海へ流れこんでいる川にも原因があり、海の問題なのではなく、川を含めた問題と言えるのではないかと考える。だからこそ、川の清掃活動は必要不可欠だ。そのためには、私達の川への意識を高めることが重要だと思う。昔に比べると、私達が山や川で遊ぶことや様々な種類の動植物を見たり触ったりする機会というのは減っている。そのため、未来の子供達にはたくさん自然に触れ、川への意識を高めてほしい。

今のままの生活を続けていては、豊かな自然を守ることができない。そのため私達は自らを変えていかなくてはならない。

大岡川は私達の努力次第で変わることができる。大岡川を汚いと言う人がいなくなる日が来るかもしれない。もしかすると、街中でもホタルを見られるようになる日も来るかもしれない。

大岡川の源流を一度は訪れてほしい。豊かな自然ときれいな水に、触れてほしい。

入選

私達がつなげる水のバトン

富山県 高岡市立牧野中学校 二年 中野 友貴

私は先日、あるニュースを見て衝撃を受けた。それは、一匹のカメの映像だった。鼻に詰まったストローのせいで呼吸困難に陥っていた人がとろうとしてもなかなかとれず、首をふって抵抗していた。血が流れ出していた。痛そうで、思わず目を背けてしまった。悲しかったけれど、同時に関心も持った。どうしてこんな事になってしまったのか。調べてみると、似たような事例がいくつも見つかった。胃の中から大量のゴミが発見されたクジラやイルカ。廃棄された漁網、ゴーストネットに絡まったアザラシや海鳥。たくさん出てくる写真に、胸が痛くなった。そのほとんどの原因は、海に漂う「プラスチックゴミ」だった。

安価で生産できる、加工しやすい、耐久性がある、と優れた点が多いプラスチックは、ペットボトルやレジ袋など、姿を変えて身近にたくさん使われている。手軽に使いやすい分、多くが使い捨てされる。捨てられたり、廃棄されたり、舟での事故が起きたりと様々な理由で海に流れついた、約一億五千トンも存在するプラスチックゴミは、たくさん生き物達に影響を与え、命をも奪っている。

目に見えるプラスチックゴミは被害が分かりやすいが、五ミリ以下にまで粉々になったものは「マイクロプラスチック」と呼ばれ、中には肉眼で見えないものもあり、被害が分かりにくい。が、例えばある一匹の動物プランクトンがマイクロプラスチックを誤って食べ、それを魚が食べ、その魚をさらに大きい魚や海鳥やアザラシなどが食べる。食物連鎖が起こるのだが、それを人間が食べたとすれば、体にプラスチックがたまると。実際、スーパーマーケットで買った全ての二枚貝や、東京湾でとれたイワシの約8割からマイクロプラスチックが発見されたという事や、世界中の食卓塩やアメリカで採集された水道水からも高確率で発見されているということ、そして、オーストラリアの研

究グループが発表した日本やヨーロッパなどの8人の検体全員からマイクロプラスチックが発見されたという結果からも、危ない状況だと分かる。私達の体にもたまりはじめているかもしれないのだ。

これ以上海が汚れてしまうと、今以上にひどい被害が起きてしまうかもしれない。既にたくさんの方で様々な取り組みが行われていて、私が住む富山県ではレジ袋の有料化が進められている。皆がマイバツクを持参すれば、レジ袋の利用回数が減り、その分、水質改善につながる。このまま続けてほしいと思う。

私は、今回の事件で以前よりも水質汚染について興味を持つようになった。海岸清掃のボランティアをしたり、プラスチック製、その他の資源のものを無駄に使用する事はひかえたいと思う。そして、私が考えた事をたくさんの方と共有し、理解しあう。私は、水質汚染を止めるために必要なのは、「一人一人の理解と意識」だと思う。たくさんの方の人に知ってもらい、一人一人が自分には何ができるだろうと考え、実行していけば、やがて大きな力となる。

私達より前に生きた人達は、必死に、水、そして豊かな資源を守ってきた。それを託された私達は、受け継ぎ、次の人達へ届けなくてはならない。今、水が汚れて困るのは、私達だけではなく、未来を生きる人達、生き物達なのだ。

海は、水は、私達の命の源。

一人一人が理解し、意識すれば、水質汚染は止められるはずだ。

入選

巴川のいいところ、お伝えします。

静岡県 静岡市立清水第八中学校 三年 飯塚 颯

「おおっ、きれいだなあ。」

昼間の巴川には似合わない表現だが、巴川のほとりが一本の灯りで彩られていたのだ。光は川面に映り、二本の光の筋が真つ暗な川を幻想的にしていた。真つ暗で不気味でさえあった対岸が冬の間、見ていたい場所になっていた。春先には、その手前で多くの梅の木が咲き誇り、夜の暗さに映えていた。地元の商店街の巴川を思っている大人たちがやってくれたのだ。うれしいような、僕にできることはないのかなと少し残念な気持ちになった。

そんなある日、テレビで隅田川が昔はとても汚れていて悪臭がひどい時期があったと知った。「隅田川」といえば音楽で習った「花」にでてくる春のうららかさが美しくのどかな川だと思っていた。それが花火大会も取りやめになるほどの悪臭で人々から避けられていたなんて。番組では清流にしか棲めない生き物がいた頃の姿から、護岸工事を行い、人々の生活の中で汚れていった過程が説明された。僕は衝撃を受けた。おじいちゃんから聞いていた巴川の話と全く同じだったからだ。ごみを巴川に捨て、生活排水も流していたという話だ。調べてみると、「花」は明治時代に作られていた。歌われているのは明治時代の姿だったのだ。昭和の初め頃に生まれたおじいちゃんたちは学校から帰ると川で遊んでいた。しかし、母が小学校の頃はすでに巴川は臭くて汚い川だったそうだ。隅田川の映像に巴川が重なって見えた。しかし、番組の趣旨は川にどんな生き物が戻ってきているのかを見せ、川が甦っていることを伝えることだった。

巴川はどうなっているのか。散歩での出来事が浮かんだ。巴川の支流が合流するその場所では桜の花びらが川面を彩っていた。花びらを追い、橋の向こう側を覗こうとした瞬間、大きな鳥が足元から飛び立った。真つ白なその美しい姿と、この大きな鳥がこんなにも近くに潜んでいたこ

とに驚いた。僕の口から出た言葉は「ごめん！」だった。彼の空間に不用意に踏み込み、追い出してしまったと感じたのだ。僕の生活空間と、この大きな鳥の生活空間は気がつかないうちに重なっていた。自然が戻りつつある範囲が広がってきている。今まで僕は、巴川を昔の姿に戻すことが目指すべきところだと思っていた。しかし、新しい形でのつきあひ方が必要だと気づいた。都会を流れる隅田川の映像にもヒントはあった。

僕はおじいちゃんが見ていた巴川を見たいと思っていた。でもそれはこれからの巴川の姿ではないのだ。僕たちが目指すのは、昔の姿を取り戻すことではなく、川の未来、人間と川とのこれからの触れ合い方だ。上流や中流は川に入つての水遊びや足を濡らして生き物を探すような触れ合いの場に、僕の住む街を流れるような護岸で囲まれた場所では、川沿いを散歩しながら、川を見て休憩し、川の周辺に人が集まるような関係を築いていきたい。今の僕には設備を整えることはできないが、巴川のイルミネーションや梅などの話を周囲に広めていくことはできる。少しずつ、巴川の近くに人が集うことを目指して。

川や川に生きる生き物が中心の場所と、人間の活動場所を川が流れていく場所。巴川が少しずつ浄化されてきて、二つの世界は近づいてきている。桜の散る水面を覗いた僕と、息をひそめていたシラサギが出くわしたように。僕にとつての散歩コースと、シラサギにとつての快適な住処はとても近く、共有している部分もあるのだ。そんな当たり前の世の中の重なりを意識することは大切な感性だ。巴川を尋ねて歩き、ナマズを追いかけていた子、川岸でバーベキューをしていた人たち、日課の散歩していた外国の人など多くの人と出会ってきた。彼らは巴川との共存の感性がある人たちだ。僕はこれから、巴川の心ひかれる風景などを積極的に発信していきたい。彼らと共にこれからの巴川をつくれるように。

入選

黄金堤と吉良様

毎年、十二月十四日、西尾市吉良町にある華藏寺には、たくさんの方の吉良町の方がお参りにみえます。吉良上野介様の命日の日です。忠臣蔵では、ご存知の通り悪役でのイメージが強いですが、地元では「吉良様」と呼ばれて大変尊敬されているそうです。

僕の曾祖父までは、吉良町に住んでいたそうです。そして僕の母方の祖母は、吉良町出身です。

「吉良様」と呼ばれるくらいの方だから、きつと地元ではすばらしい功績を残された方に違いないと思いました。

父母や両祖母から、こんな話を聞きました。「黄金堤」という、今でいう堤防を造られたそうです。しかも一日で。別名「一夜堤」と呼ばれているそうです。

僕はなぜ「黄金堤」を造らねばならなかったのか気になり、吉良町の資料館まで行き調べることになりました。

江戸時代まで、さかのぼります。

この堤がある一帯は、大雨などによる増水のために隣藩上流の広田川、須美川から流れ込む水により洪水が起こり、水路もたびたび変わる泥沼地帯であったそうです。

その南にある吉良領は洪水が起こると田畑や家財が流されるの繰り返しであったそうです。

一六八六年、水田地帯の住民を救うべく、吉良義央、後の吉良上野介が私財を投じて、鎧が淵の上流に長さ一八〇m、高さ四mの堤を築いて流れを矢作古川に合流させるようにしたそうです。この堤は領民の力を結集して一夜にして築堤されたそうです。故に、「一夜堤」と言われるようになったそうです。当時としては、水が漏れないように粘土が使用されるなど現在の技術からみても優れたものであるそうです。この堤で吉良八千石が水害から守られ、金色の稲穂が田を彩るようになったことから「黄金堤」と呼ばれるようになったそうです。

愛知県 碧南市立新川中学校 二年 石川 昂平

水とのかかわりは先人から現在まで受け継がれています。それは水との戦いでもあり、水からの恩恵でもあり、共存でもあります。

水は地球に生きているものすべてに欠かせない命の源です。

水は僕達に様々なことを教えてくれます。時には、怒り、豪雨や洪水を起こし、時には、恩恵を与え、秋には五穀豊穡に感謝する祭礼を全国各地で開催させてくれます。

「吉良様」はこの水の教えを知っていたのでしょうか。

水の怒りを鎮め、陳謝するために、治水事業を行い、私財を投じて領民とともに一夜にして「黄金堤」を造られました。

水も、その功績を称えるかのように、「黄金堤」築堤後、洪水で苦しんでいた領民の田にたわわな稲を実らせてくれました。

「吉良様」はその様子を赤馬に乗られて見回りに来られたそうです。

まさに水との共存です。

僕は、このことを知り、先人の水に対する思いは、計り知れないものがあると痛切に感じました。

現代に生きる僕達は、水道の蛇口をひねれば水が出て、コンビニに行けば水を買うことができ、それが当たり前だと思って毎日、生活をしています。

「吉良様」の水に対する思いを知り、改めて水に感謝して、毎日を生活していきたい気持ちでいっぱいになりました。

今月の四月に「黄金堤」を訪れました。

満開の桜並木が堤街道に咲き誇っていました。その桜並木をゆっくり歩き「吉良様」の治水に対する思いを感じていました。

さわやかな風が吹く中、「吉良様」が堤街道を赤馬に乗られて、これから田植えが始まる田を満面の笑みを浮かべて眺めている姿が僕のまぶたに焼きついてきました。

「吉良様の 思い奏でる 鼓(堤)かな」

入選

川の水のもたらす暮らしの豊かさ

三重県 高田中学校 一年 米山 百音

私は、「水について考える」というテーマから、川の水のもたらす暮らしの豊かさや川の水が人々の生活にどのように影響しているかを考えてみたいと思った。

川は大雨が降ると増水、氾濫し水害をもたらすことがある一方、大事な飲み水や川魚などの食料を確保する場でもある。氾濫や土砂災害から人々の暮らしを守るため、行政は河川改修や砂防対策を行いダムを造った。これらの整備により人々の安心・安全な生活は確保された。しかし一方で、人々と川との関わりが薄くなってしまった様な気がするのは、私だけだろうか。

そこで、休日を利用し「水のまち」と言われている岐阜県の郡上八幡を実際に訪ねてみることにした。郡上八幡といえば、有名な徹夜踊りがある。「郡上おどり」の歌の歌詞を調べると、「郡上はよいとこ住みよいところ水もよければ人もよい」など、水に関係するものが多いことに気づく。郡上八幡に住む人々が昔から深く水と関わって生活していることがわかる。郡上八幡に行き町を歩いてみれば、川の水が人々の生活をどう潤しているのか感じる事ができ、水と人々の暮らしの中に何か発見があると考えた。

郡上八幡は岐阜県を流れる長良川の上流に位置し、奥美濃の深い山々を源流とする吉田川、小駄良川など三つの川が合流する所にある。標高は一〇〇m〜一八〇〇mの山まで起伏に富み、名古屋から郡上八幡へ向かう車中からも壮大な自然風景を見ることが出来た。川の水が透き通っており、山と川の美しい色のコントラストに思わず目を奪われた。しかし水に恵まれているということは、想定を超える降水量により水路から水があふれたり、川が大雨によって増水し、堤防が決壊したりする自然災害も起こりうる。実際に、平成三十年には豪雨災害が起こり、累積雨量が一〇〇〇ミリを超え、長良川鉄道の土砂崩れ、床上・床下浸水、

河川護岸の崩落など被害は大きかったようだ。

町を訪ねてみると、郡上八幡の水道普及率は一〇〇%であった。それにもかかわらず、郡上八幡の人々は井戸や湧き水と共存し、大切に用水を護りながら暮らしていた。食べ歩き飲食店近くの水路にも川にもプラスチックゴミ一つ落ちていなかった。町の人々の水を大切に思う気持ちが観光客にも伝わり、川を大切に、水を汚さないようにさせるのだろう。我が家のように、水道だけしか使っていない家庭が圧倒的に、郡上八幡の人々は「便利な水道だけを使う」という選択をしていない。水とのつき合い方を歴史の中から学び、水に寄り添いながら暮らしているのだと思った。この町を取り囲む山々からの冷たい水は、町のいたる所で湧き出ていて、人々の暮らしになくならないものとなっていた。豊富で清らかな水が流れる水路が町をつなぎ、そこはたくさんのお魚や鮎が泳いでいた。また、水路が町を張り巡らしているため、いつでもどこでも水の音や流れを身近に感じる事ができた。まちなかの散歩が気持ちよく、水の流れる音や、鳥のさえずりなど自然の音で全身がリラックスできた。水は生活を送るうえで必要なだけでなく、人に安らぎを与えてくれることが分かった。町の人々の心も「水」を通してつながっているように感じた。郡上八幡という町は、私が想像した以上に水と人々の暮らしと関係が深く、「水」が生きる力の源になっている気がした。

水の大切さは、だれでもわかっているが、普段の生活では、水道の蛇口をひねればいつでも水が使えるため、そのことを、つい忘れがちになってしまう。郡上八幡の町を訪ねて、川の水がもたらす暮らしの豊かさを体で感じることで川に対する思いやりを持ち、水を大切に使うことがとても大事なことだと改めて気付かされた。

入選

有栖川の清掃活動

京都府 京都学園中学校 三年 山下 莉咲子

私は小学四年生のとき、総合的な学習の時間で近くの有栖川を掃除しました。当時の有栖川の様子は、四年経った今でも私の記憶に残っています。みんなで清掃活動をするために行った時の有栖川は、空缶やゴミ、傘や携帯電話まで捨てられていました。ゴミを拾うことが大変だったということよりも、ゴミの内容と量の多さに衝撃を受けたということが私の中では強く印象に残っています。私は、どう考えても携帯電話などを川に捨てる人の気持ちが無理解できませんでした。うっかり落としてしまっても、私なら取りに行くと思うので、この状況をどうにかしないとけないなど掃除をしながらずっと考えていました。私たちが掃除をしていると、地域の方たちも集まって協力してくれたので、そのときは嬉しかったです。

この清掃活動をきっかけに、十月には地域の方に有栖川についての話をうかがいました。そこで、

「今の有栖川と昔の有栖川とはどちらがきれいですか。」との質問をしました。地域の方は、

「今です。」

と答えられました。私は当時、有栖川を掃除した時にたくさんゴミが捨てられていたので、不思議に思いました。今は、「有栖川をきれいにしよう」と計画を立て、年に何回か掃除をしているそうです。私は、地域の方たちが有栖川を大切に想っていると感じ、私も大切にしていこうと思うようになりました。

また、有栖川は桂川に流れています。桂川はここ十年ほど、良好な水質を維持しています。つまり、桂川などの大きな川につながっている有栖川のような小さな川をきれいに保っている、大きな川もきれいに保たれるということがいえると私は考えました。生活環境の保全に係る環境基準は、上流で桂川に流入する清滝川は最も良い水質を目標としてい

ます。これを知って、私は、近所の川からきれいにしていき、大きな川もきれいになると信じて掃除を積極的に取り組んでいきたいです。

地域の方によると、昔の有栖川では、普段から洗濯物を洗ったりするときに有栖川を利用していた人がたくさんいたそうです。昔より今のほうがたくさん掃除などの政策を地域でしているからきれいになっている、と言われて納得できました。

小さな川と大きな川の水質は同じなので、外国の方が日本の有名な川を見て、汚いと思われる、小さな川も汚いということになり、日本の川は汚いというイメージになってしまいます。なので、私は家の近くにある小さな川から大切にきれいにしていきたいと思いました。

有栖川には、今ではカモがたくさん飛んできて、気持ち良さそうに泳いでいます。私は学校の行き帰りに通りがかかった時、その景色を見ると、とても嬉しい気持ちになります。カモが飛んでくるということは小さな魚も住んでいるのかなと想像します。そして、小学校の時の川の清掃活動と地域の方のお話を思い出します。

あの時、あんなにゴミだらけだった有栖川が、今は魚や鳥がいるぐらいのきれいな川になっているのは、あれからずっと続いている地域の方々や小学生の清掃活動があるからだと思えます。そして、みんなの「自分たちが住んでいる町の川をきれいに保ちたい、カモがたくさん来てほしい」という同じ想いがあるからだと思えます。

いつまでもこの気持ちのいい景色を見続けることができるように、落ちているゴミを見つけたら拾ったり、町内の溝掃除を手伝ったりと、私も自分にできることから協力していきたいと思えます。

入選

新しい時代につなぐ水

大阪府

大阪教育大学附属池田中学校

一年

藤山 ゆかり

地球上の生命にとって欠かすことのできない水。「地球の水は、形を変えながら空と陸と海を循環している」と理科の授業で習った。そして、大昔から水のある場所で人々は生命をつなぎ、文化を発展させてきたことを社会の授業で学んだ。しかし、その循環のバランスを失った時、生命をつなぐはずの水は、生命を奪うものになり、長い時間をかけて築いてきたものをほんの一瞬で崩してしまふ。

平成最後の一年は、その年の漢字が「災」に選ばれるほど、自然災害の多い年だった。私が住む大阪府北部では、六月に震度六弱の地震、九月には記録的な台風の被害を受けた。

六月十八日の朝、私は小学校に向かっていた。ちょうど駅の改札を出たところで、足元にドンという衝撃を感じた。今までに経験したことのない大きな揺れと音に、思わずその場にしゃがみこんだ。その後「地震です、地震です……」というアナウンスが駅に流れた。出勤途中の大人までもが動揺し、携帯電話を片手に立ちつくしたり、心配そうに周りを見ていた。停電で電車が止まり、帰れなくなった私たちを両親が迎えに来てくれた。

昼前によくやく家に帰り、手を洗おうとすると、水が出ない。洗面所だけでなく台所も風呂場も、水道のレバーを上下左右にいくら動かしても何も変わらない。普段の生活では必ずそばにある水がない状態はとても奇妙で、このまま水のない生活が始まるのかと不安になった。その時、阪神淡路大震災を経験した祖父から、「水が出るなら、浴槽に水をためなさい」と、熊本に引越した直後に大地震にあった伯父からは、「お水を使う時はラップをひいて使いなさい」と連絡があった。どちらも共通して、生活に必要な水を確保するための行動だ。近くのお店の棚からは、あつという間にペットボトルの水がなくなつた。どんな時でも、水は生きていくために必要なのだと強く感じた。家の中で唯一、トイレの手洗

い器の蛇口からは、ちよろちよると水が流れていた。蛇口や元栓を開閉しても、水の流れは変わらない。その水を使って手を洗うには何十分もかかりそうだし、本当にきれいな水なのかも分からない。それでも、一滴も水が出ないよりはいいと思つた。

地震後の数時間の断水は、分かっているつもりで分かっていたなかつた大切なことに気づく機会となつた。これまでは何も考えずに流してしまつていた飲み残しのペットボトルの水。これからは植物の水やりに使おう。食後、食器に残つた汚れは不要な紙でふきとってから洗おう。洗濯物の下洗いは残り湯でするといい。小さなことだけれども、日常生活でできる限りのことに取り組んでいくことが重要だ。地球上には、災害による水不足だけではなく、常に水が足りていない国や地域がある。それは、目に見える水不足が起こっている場所だけを見ても解決しない。地球の一部で水がうまく循環していない状態は、いつしか地球全体に悪い影響を与えることになるからだ。地球の水の循環は、人間の体の隅々まで水がめぐっているのとよく似ている。

二〇一九年五月、令和という新しい時代を迎え、日本は「水問題」をより身近に感じるようになるだろう。私たちのそばにいつもきれいな水があつた平成の時代。そこには、私たちが安心して使うことのできる水を届けるために、整備や管理などに関わる多くの人々の努力があつたことを忘れてはいけない。恵まれた環境を与えられていたことに感謝し、これからは一歩進んで、世界の全ての国や地域の人、次の時代のことでも考えて行動する。限られた資源を分け合い、大切に使い、循環させる仕組みをみんなで作り上げていくことが必要だ。地球全体にきれいな水をめぐらせるといふことは、私たちが自身の生命をつないでいくことと同じなのだから。

入選

水の行き先

大阪府 四條畷学園中学校 二年 平野 暖奈

家の前を通ると、水の流れる音がする。ボランテシアの方に案内され、勝手口の方から入ってみると、足元の畳一畳分ほどのスペースに、水がたまっており、中に水がめが置いてあった。水がそそがれる仕組みになっていて、「かばた」というらしい。のぞいてみると、中に野菜がつけてあった。水がめの周りを見てみると、鯉が何匹か泳いでいた。ボランテシアの方に勧められてかばたの水を飲んでみると、ひんやりとしていて、暑さで渴ききった喉に心地よかった。滋賀県針江地区。私が小さい頃、家族と一緒に旅行した場所。この水の作文を書くにあたって、あのもとでも素敵な集落のことがふと頭にうかんだので調べてみることにした。

四季を通じてきれいな水が湧く、針江地区。人々はこの自噴する清らかな水をかばたを通して飲料や炊事といった日常生活に利用している。地下二〇メートルから湧き出す地下水は、生水（しょうず）と呼ばれ、宝の水と言われている。生水はまず、かばたのつぼ池と呼ばれる所にためられ、野菜などを洗うのに使われる。そして、食器などを洗う、はた池という、鯉も泳いでいる所へと流れおちる。食器などに残っていた残飯は、飼われている鯉にあげると、きれいに食べてくれるらしい。やがてきれいになった水は琵琶湖へと流れていく。究極のエコ生活である。しかし、今、蛇口をひねればきれいな水が当たり前のように出てくる私達にとって、かばたというものは、身近なものではない。観光名所という位置付けになっている。

私は、かばたから水との向き合い方を学ぶべきだと思う。かばたでは最後に残った残飯を鯉に食べさせていた。それは、いずれその水が、琵琶湖へと流れていくことを考えているからだと思う。つまり水の「行き先」を考えているのだ。私はこれこそが大切だと思う。

二〇一五年現在、世界では二一億人もの人が、安全に管理された飲み水を使用できないでいる。このうち一億五九〇〇万人は、湖や川などの

水を利用している。こうした不衛生な水を利用したせいで、毎日約八〇〇人の子供達が大切な命を落としている。いずれも、きれいな水が手に入る日本では考えられないことだ。けれども、汚れた水は我々人間が生み出してしまっている。

水質汚染の一番の原因は、生活用水だ。みそ汁の残り、ラーメンの汁、米のとぎ汁、ビール、牛乳、あげ物に使った油、食器洗いに使った洗剤：など、台所だけでも挙げはじめたらきりが無い。でも、このような水質汚染の原因は、一人一人の意識でなくせるのではないだろうか。例えば、食器についた油汚れは洗う前に拭きとる、流しの排水口に目の細かいストレーナーをつけるようにする、など、私達にできることはたくさんある。一人一人の意識一つで水質汚染で苦しむ人をなくせるかもしれない。そして、その意識の根本にあるのが、使った水の「行き先」を考えることなのではないだろうか。

先人達から受けつがれてきた、素晴らしいかばた文化。そこには、水を宝の水と思い、大切に使う姿があった。水の行方を考えるからこそ、あのきれいな水が保たれているのだ。

水は循環資源。今私が使った水は、必ず次に誰かが使う。もしかしたら自分かもしれない。そのことを考えてみたことがあっただろうか。水の行き先を考えることは、未来の私達の行き先を考えることと同じなのかもしれない。

入選

かけがえのない大切な水

兵庫県 神戸市立平野中学校 3年 天羽 悠月

キーン・コーン・カーンコーン。終業を告げるチャイムと同時にガタと椅子を動かす音が広がる。向かうは水道。蛇口をひねると水が勢いよく流れ出し、指先から伝わる冷たさが私を包み込んでいく。皆さんは一日のうち、何度水に触れ使っているか数えたことはあるだろうか。私は食事も含め“約三十回”も関わっていた。今まで水の大切さを理解していると思っていたが、普段使用している水についてあまり意識をしたことがないのに気づき、改めて考えてみることにした。

京都府・芦生。原生林が蓄えた水が流れる川のそばに、小学生の頃通った自然学校がある。そこでは自然と共に暮らす人々の知恵と教訓を学んでいく。山の神への挨拶から始まる一年。川で米を洗い、山菜取りや米づくり・鶏さばきなどといった自然の恵みと大切な命を頂いていくうちに、私も自然の一部であると感じた。活動をするなか、川で洗い物をしているとき、「下流の人のことも考えて」と伝えられた。生命を育む水は、上流の人だけでなく下流の人まで使う、分け合うべきもの。山の天候は一定でなく、雪が少なければ春の田に水が張れず、豪雨で川が氾濫を起せば実った稲だけでなく命も脅されることとなる。様々に姿を変え存在する水は、まるで繊細な生き物のようであり、恐しい自然の一部でもある。

目まぐるしい発展をしていく、水の惑星・地球。人がすぐに使える水は全体のわずか0.002パーセント。増え続ける人口。調べてみると十一億人が水不足に直面し、二十七億人が年にひと月は水の利用に問題を抱えている。私は「水が足りない」と焦りを覚える。また、私達にとって当たり前の「飲める水道水」。世界で十五ヶ国しか使うことができないう。そして、水に恵まれているように見える日本も年々水資源が減少しており、特に都市部は一人あたりの使える量が北アフリカや中東諸国と同程度であるという。私は日本の国土のなかで、山間部の占める割合が

多いと想像していただけに実際の少なさに驚いた。

さらに、日本は輸入大国といわれ食料・製品と身の回りにあふれるものの中に姿を変えた水がある。産業と水。これから先、私はそのつながりを考えていくべきテーマだと思う。人の暮らしのそばにAIをはじめとした技術は一段と存在していくことだろう。その時、水のあり方は大きく変化するのではないか。暮らしの発展により私達は一層自然から遠ざかり、大切なものを見失ってしまうように思えてくる。

「ぜひ一度立ち止まってほしい」。

蛇口から流れる水は、山・川・海、やがて私達へと循環していることを。

私はこの作文を書くまで「水がない」ということはどこか遠いはなしだと思っていた。だが、今回いかに水がかけがえのない大切なものであるかを知ることができた。やがて私達が世界を動かす中心となるとき、皆が「安心して飲める水」に触れ、分け合い、大切にしたいくなる、そんな世界を目指したい。

私には残したい風景がある。鳥の声が響く川と吹き抜ける風、木々がざわめく音。真夏に喉を潤す流れでる水。子供の時にした水遊び。次から次へとあふれくる水の風景。それらのホッとするような温もりは、私達の中にある。それを守るために一人ひとりが水を意識し動き出せば、未来をつくり出す大きな力となる。水に触れるとき、ぜひ思い出して欲しい。地球はひとつの水の惑星なのだ。私はキュッと流れる水道の蛇口を閉めた。頬を風がすり抜けていく。

皆さんは、どんな水のある風景を残したいですか。

入選

美しい水と、共に。

和歌山県 和歌山県立向陽中学校 二年 大棟 日花莉

「水は、なんて美しいのだろう。」

そう思ったのは、ある本との出会いからだ。小学校の図書室で偶然手に取ったその本は、水の様々な姿をとらえた写真集。中には、水しぶきなどの一瞬の形をとらえた写真がたくさん載っていた。私は、その中でも、蛇口からしたたるしずくが水面で、冠の形をつくっていた写真に釘付けになった。透明なしずくが生み出したその冠は、まるで水晶から削り出した彫刻のようだった。恐ろしいほど、美しかった。この日、私は初めて、水には「美しさ」があるのだと知った。

水の写真集を読んでから数カ月たったある日、私は、小学校の課外学習で地域の浄水場を訪ねた。ここでは、井戸からくみ上げた地下水を、飲めるほどの綺麗な水道水に生まれ変わらせ、各家庭や施設に届けている。私は、水が届けられるまでの工程に関わる人々の、努力に度肝を抜かれた。浄水場には、多くの機械がある。なんと、浄水場で働く人々は、一年中その機械を動かし続け、夜も交代で仕事をしているという。また、水を届けるまでの工程に関わるのは、浄水場の人々だけではない。他にも、毎日、水質の検査をする人、水道管が壊れるとすぐに修理をする人、人口の増加に伴って設備を新しくする人……。私たちの想像を絶するほどの人々が、安全な水を届けるまでに、日々、たゆまぬ努力を積み重ねている。そんな話を伺って、私は、はたと気がついた。以前、私が水の写真集を読んだ時、蛇口からしたたるしずくがひときわ美しく見えたのは、そのしずくが、多くの人々の努力や思いを含んでいたからではないだろうか。人間が使う水を届けるために、人間が水をきれいに、美しく生まれ変わらせる。浄水場だけでなく、汚水を浄化する浄化センターもそうだ。人間が使った水が、これらの施設によって生まれ変わり、生命の源となる。このような人々の努力の賜物である水は、やはり輝きを増すだろう。

古代から、水は、人々に寄り添ってきた。その証拠として、日本神話には、何人も、水に関する神様が伝えられている。人間は、長きに渡って水の恩恵を受けてきた。しかし、水は、時に人間に牙を向く。大昔から、大雨、洪水、津波などの水災も、人間は受けてきた。それでも、人々は、そんな災厄をもたらす側面も受け入れ、様々な対策で工夫をこらし、水と寄り添ってきた。そして、古来から、神様として祀るほどに、恵みをもたらし、生命を育む水の美しさに魅了されていたのだ。

人間には、恵みの水が必要である。水資源豊かな日本とは違い、海の水でつながっている世界には、まだまだ汚水を綺麗にする技術がなかったり、水不足で苦しんだりしている国もある。世界中の人々が、ずっと美しい水を追い求めているのだ。けれども、地球上の水は無限ではない。そして、その中でも、人間が利用することのできる水は、〇・〇一パーセントほどしかない。だから、水を廃棄物などで汚したり、無駄に多量に使用していると、この先の未来、水を永遠に手に入れるのが困難になるかもしれない。では、水を永遠に得るために、私たちに何ができるのだろうか。人々の努力のつまった水は美しい。昔の人々は水の偉大さに気がついてきた。これらのことから、私は、人々が水の持つ美しさ、私たちに恵みを与えてくれる偉大さを感じるべきだと思う。そして、その水の使い方を考え、天ぶらの油をそのまま流さないようにしたり、こまめな節水を心がけたりする。根本的な考え方が変われば、水との接し方も変わる。毎日少しずつでも、そうした行動を積み重ねることで、水と寄り添う未来が輝くのではないだろうか。私たちは、これからも水と共に生きていく。だから私も、これからは水の美しさ、偉大さを感じ、水と共に歩む未来のためにできることを積み重ねていきたい。

入選

新たな決意

徳島県 那賀川中学校 三年 笠江 彰

「ありがとう。友よ♪・・・。」微かな「やまびこ」を身体の奥の方で感じながら僕は伴奏を終え、鍵盤から静かに手を離れた。昨年十月に行われた「那賀川源流コンサート」。一昨年に続いてピアノ伴奏ボランティアとして参加させていただいた。

「那賀川を大切にする活動を受け継ぎたい」こんな思いを強く抱くようになったのは、二年前に那賀川下流の僕の家から数百キロも離れたところに建てられている源流碑やモニュメントを見た時からだ。コンサートの後、もっともつと那賀川のことを知りたいと祖父に相談したところ平成十八年にスタートした「那賀川源流開き(源流探検ツアー)」を紹介してくれた。那賀川の「水の原点」を確認するだけでなく、様々な活動が計画されていることを知り、十三回目となる昨年五月のイベントに参加した。

まず、参加者全員で山と川の神に流域の湧水や洪水がなく安全であることを祈願して、源流開きをした。源流碑周辺の清掃を行い、那賀川の「上下流交流会」が開かれた。最初に那賀川源流の調査・特定に携わった阿南高専の湯城豊勝名誉教授が、源流の定義と決め方について話して下さった。源流は川の長さ・水量・標高・年間を通じて流れがあるかどうか・地元の人の話などを参考に特定するのだそうだ。少しだけ那賀川や水資源に詳しくなつたような気がして興味深く話を聞くことができた。さらに嬉しかったのは、会場に僕が感動した源流碑とモニュメントを制作された井下俊作先生がお越しになられていて、材料やそれぞれに込めた想いについて伺うことができたことだ。その後、上下流の小学生や中学生、高校生による学校紹介・校歌交換をし、僕は友人や弟が歌う校歌を鍵盤ハーモニカで伴奏して会場はとても盛り上がった。

素晴らしい自然の中で「源流餅」をほおばり、昼食をとった後、源流地点探検に向かった。剣山トンネル横広場に設置された源流碑からモ

ニュメントにある源流点(標高一三六〇メートル)までの遊歩道は片道約八〇〇メートルあった。遊歩道の両側にはみずみずしい新緑のブナ・ナラなどが森を形成し、それぞれに銘板がついていることから樹木名を確認したり、生態系環境を学習したりすることができた。「豊かな森が豊かな水を生む」ことを実感した。

以前は大人の背丈よりも高い笹が生い茂る急峻な斜面だったと聞いた。源流地点を特定後、遊歩道を整備されたフォーラムの方々のご苦勞を思い、感謝しながら歩みを進めた。

源流地点の水を手につくって飲んだ瞬間も忘れられない。水は冷たく、今まで味わったことがない「透き通った透明な味」がした。簡易水質パックテストによる源流水質調査も行った。下流の桑野川の水をサンプリングして持参してくださり、源流の水と水質比較を行い、源流の水質の良さを確認した。

「那賀川源流開き」は、湧水や洪水対策を祈願するためだけの取り組みではない。一人でも多くの人が現地を訪れ、源流の清らかな水と触れ合い、水の恩恵や治水について知ってほしいという想いが詰まっている。僕はこのイベントに参加して改めて「水の大切さ」を再確認した。日常の「平地の生活」では味わえない貴重な体験ができたと関係者の方々に感謝の気持ちでいっぱいになった。

「ポチャーン・・・。」余韻を残しながら少しずつ広がっていく水の輪。僕は川面に広がる水紋を、のんびり眺めるのが大好きだ。できることなら那賀川流域に住む若い世代の一人として、少しずつ水紋のよりに周りの仲間へ想いを伝えていきたい。昨年は数名の友人を誘いイベントに参加できた。世代を超えて水に感謝する想いを共有し、引き継ぎ、さらに広げていきたい。那賀川の流れを目の前にし、今そう思っている。

入選

水は限りある資源

愛媛県 今治市立大西中学校 二年 阿部 裕介

「味が、違う。」

姉が、顔を曇らせてつぶやいた。受験に合格し、県外の大学へ進学を決めた姉は、一人暮らしを始めるために引越をした。家族総出で荷物を新居へ搬入し、少し休憩しようと、母がお茶を用意し始めた時のことだ。洗面所で手を洗い、口をゆすいでいた姉の一言。水道の味が、家の味と違う。旅行先でも、よく経験することだ。慣れない味に違和感を覚えるが、数日くらいは我慢できる。しかし、姉は今日から、この水で生活する。異郷の地の水を口に含んで、環境が変わることを、姉は改めて痛感した。姉の門出の日のこの一言は、家族を少し寂しい気持ちにさせた。

水は、人の心や体に、大きな影響を与える。「水が合わない」、「水に慣れる」、「水に流す」など、「水」が使われた慣用語が多いことから、人と水との深い関係が読み取れる。水は、私達が生きていく上で、欠かすことができない大切な資源だ。水の安定した供給が滞れば、人命に直結する深刻な問題となる。日本は世界の中でも降水量が多く、きれいな水源に恵まれ、その上、飲み水に対して厳しい基準を定めているため、蛇口をひねれば、いつでも安心安全な水を飲める環境にある。それ故、水に対する危機感が薄い。しかし、近年、度重なる自然災害を経験したり、水道の民営化法案が可決されたり、世界の水事情を報道で知ったり、水に関する問題に直面する機会が増えてきた。水への関心が高まっている今こそ、真剣に考え、動くべき時だ。水を守るために、私達一人一人ができることは何か。

「水は、限りある資源」

この言葉の意味を、改めて考えてみよう。私達は水を、どのような手段で手に入れているだろう。主に、水道や井戸、ペットボトルであり、それぞれダム、地下水、湧き水から得ている。それらの水は全て、雨が溜

まったものであり、雨は、海や川の水が蒸発し、上空で冷やされて降ってきたものだ。つまり、私達が飲む水は、常に新しいものが湧き出てきているわけではない。地球にある水の量は一定で、水は形を変えながら、地球の中を循環しているだけなのだ。私達はその循環の中から水を得て、循環の中に水を戻している。だから、「水は限りある資源」なのだ。

自然の循環サイクルが追いつかなくなると、汚染が蓄積される。自然による水の浄化機能を妨げているものは、人による過剰な汚染である。汚れた水の排水や、海をさまよう大量のプラスチックごみが、海や川の汚染を広げていることは、世界的ニュースになっている。水を守るため、つまりは、人命を守るためには、これ以上の汚染を止めなければならぬ。それには、一人一人が、「汚さない」という意識を高めなければならない。私達が水を汚せば汚すほど、もとに戻すのに時間がかかり、需要と供給のバランスが保てなくなる。食べ残しや飲み残しをやめる。洗剤は適切な量を使う。川や海へ流されないよう、ごみは持ち帰って処分するなど、必要以上に水を汚さないよう、暮らし方を見つめ直さなければならぬ。さらに、「節水」が重要だ。こまめに蛇口を止めるだけでも、回数が増えれば、取り組む人が増えれば、膨大な量を節約できる。使う水の量を減らせば、水をきれいに戻す労力も減る。以上の点は、以前から言われ続けているが、誰かの「ちよつとくらい」の行動の積み重ねで、とてつもない汚染へとつながっているのだ。

姉が、帰省した。変わらない、慣れ親しんだ水は、故郷への愛着を深める。いつも同じ状態で出てくれる水。それに甘んじることなく、私達一人一人がすべき事をやらなければいつまでも同じ条件で水を得ることは難しくなっていくだろう。一刻も早く、動かなければ。

入選

水の現場で感じた感謝

福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 三年 宇野 由里子

「火星基地の建設現場みたいやねー。」

赤茶色の土が美しく幾何学的に削られた巨大空間。ヤフオクドーム二三個がすっぽり納まるこの人工渓谷に、五五トントラックなど数十台の超大型重機が爆音を響かせ、一定のアルゴリズムで器用に行き交う。

小石原川ダムは、筑後川水系の一級河川小石原川の上流に現在建設中の、九州一の堤高一三九メートルを誇る多目的ダムだ。今回小石原川・寺内の二つのダムを見学するツアーに参加した私は今その「湖底」にいる。

移動のバスの中で、クマタカやヤマネの住環境保全、オニコナスビなど稀少植物の移植、植生回復を目指した植樹活動などが紹介され、その細やかな配慮に感動した。

しばらく走ると、今も残る二〇一七年七月の九州北部豪雨の爪痕が現れた。土台ごとえぐり取られた河岸、山肌に倒れたままの流木。そして、無残に押し潰された民家。そこにあつたはずの温かい人の暮らしに思いを馳せ、ぎゅっと両手を握りしめ、祈った。一方、力強い復興の足跡もあった。新しく造られた砂防ダム、現在も進む道路や護岸工事。人は確かに、大自然の猛威に立ち上がっていた。

近年の異常気象は「非日常」から「日常」になりつつあるのかもしれない。しかし、人々の暮らしを守るために、人間の英知を結集して大自然の脅威に挑戦するその姿がああの小石原川ダムの建設現場にあつたと気付いた。二十四時間三交代制の急ピッチの工事も頼もしく感じた。そして何より私たち一人ひとりがこれまでの判断基準を変えて、日頃から「もしも」に備えることが大切だと考える。

峠を一つ越え、寺内ダムの管理所にお邪魔した。制御室に入ると、おびただしい数のボタン類と大型モニターなど、ハイテクな設備に驚いた。実直そうな所長代理の方が、ここ二年間続いている豪雨の体験談を聞かせて下さった。まさにバケツをひっくり返したような土砂降りの中、以

後の予測雨量と洪水調整用に残された貯水容量を総合的に判断するといふ緊迫した治水管理。九州北部豪雨時の貯水位は、寺内ダムの最高水位である131.5メートルまであと57センチに迫っていた。しかし危機を脱した寺内ダムが果たした役割は洪水調節に留まらなかった。土砂や流木も食い止めることで、洪水時に多い複合災害も防いだのだ。寺内ダムの下流域に広がる朝倉や久留米への貢献度は計り知れなかった。お礼を言っただけで外に出た。日差しが眩しい。約束の義務感で動き出した今朝は曇りだった。いつの間にか突き抜けるほど真っ青な空が広がる。今日は来て本当によかったと思う。

ダムのシンボリックな水門まで歩いた。見下ろせば巨大な滑り台のような放水路が遠く朝倉の街へと伸びている。そしてそこに根付く人たちの生活に想いを馳せた。

いつか教科書で見た、水の循環の図。水は海から蒸発し、雲になり、雨として地表に降り立ち大地を巡る……しかしそこには描かれていない事実がまだある。それは、水は時に豪雨、津波、川の氾濫、土砂崩れを生み私達を苦しめるとのこと。そして、水が蛇口から出るまでにはダム、浄水場、配水場、排水管、数々の人工物があり、常時も非常時も変わらず水を管理し、安全に私たちの元へ水を届けてくれる人たちがいる、ということ。分かっているようで分かっている人たちがいる。水の巨大さも、水を供給してくれる人たちの想いも。現場に足を運び、自分の目で見て耳で聞き、心で感じた今だから言える。

振り返ればすぐそこにダムの湖面がキラキラ輝いている。この週末には桜がダム湖畔を彩る。私は明日の朝もまた蛇口をひねり、顔を洗うだろう。ただ今日の体験を忘れず、今までより大きな視野と感謝の気持ちをお忘れずにいよう。そして陰ながら人を支える社会人になろう、と強く心に誓った。

入選

治水と自然

私の町・唐津は治水のおかげで発展した町だ。町を流れる一級河川・松浦川とその支流はかつて度々氾濫し、甚大な被害をもたらしていたが、寺沢志摩守・高公や佐渡守長国公らが大改修を施した後は殆んど被害はなくなつたという。この前の西日本豪雨においても松浦川水系で氾濫を起したのは支流のまた支流にあたる小河川の宇木川だけで済んだ。

僕が生まれてからは水害や塩害は起きていないので当たり前のようになつてしまっているが、国の管理が入る前まではしばしば起つていたので聞いた。治水がなされていなければ今日の唐津は無かつただろうとも。今では久里・鏡用水や松浦大堰のおかげで水に不自由することはなく、そのため昨年まではそんなに考えた事はなかつたが、今年の九州北部豪雨や西日本豪雨を見て、「水を治める」ということの意味を、少し輪郭がぼやけてはいるがつかめてきている。昔の治水が無ければ、本当に今日の唐津は無かつたのかもしれない。

ただ、治水のことを知れば知る程、輪郭を鮮明にしていく疑問もある。どの治水は必要で、どこからは要らないのか。水を治める事は、元からあつた水と自然を崩すという側面も持つていてではないか、ということものだ。

僕の家の近く、松浦川の支流・半田川の中流・下流域には水田に水を引くための井堰が二つある。どちらも数年前に改修されたもので、今、新しい堰をもう一つ作る仕事を始めようとしているらしい。それはどうしても必要なのだろうか。川には何か影響は無いのだろうか。

堰を作る名目は「農業用水を確保する」為らしい。だが、予定地のまわりの水田では特に水不足が深刻な様子はあまり無いのではないかと思える。僕の知らない所では問題になつていないのかも知れないが、目に見えて困つた事がある様子は特にない。

川、特に葦原には浄水力が備わっている。ある程度の汚れは浄化して

佐賀県 佐賀県立唐津東中学校 三年 岡本 陽

しまうことができる。堰を作つてしまうと、その上流にある葦は水没してしまふし、流れも淀むだろう。多少の影響が出るのは間違いない。

生物への影響はもつと甚大だろう。僕が半田川を眺めてきた年月はそう長くないが、ここ数年で鮎の遡上はめっきり減つた。井堰が改修された事もその一因だろう。葦原が減ればそこに住む生物は消えて行くしかない。水が淀めば、住みにくくなる魚も少なくなる。

「水」とは、蛇口から出てくる透明な液体だけを指す言葉ではない。河川の、水系の、流域の、そして海洋の水の流れやそれと共にある自然も、全て合わさつての「水」なのだと思う。

治水は大切だ。全てを自然のままにしておいては今日のこの町は無い。だがそれは、自然を、「水」を蔑ろにしてまで優先されるべきではないのではないかと思う。水を治めることと「水」を生かしていくこと。どちらかが絶対であるということは無。そして、互いに全く相容れないものではないのではないかとも思っている。治水と自然とが丁度調和する点。それを探していくのが、今後の課題だと思う。

そのためには、私達一人一人が「水」について理解を深め、日頃からよく観察していく事が必要不可欠だと思う。「水」に寄り添つていく人がいなくなれば、治水が行き過ぎたり、或いは蔑ろにされていてもそれを修正していく事ができなくなつてしまふからだ。

私の町・唐津は、治水のおかげで発展した町だ。だからこそ、身近にあり、当たり前になつてしまつた「水」をより一層意識し、目を向け続け、治水と、自然との調和の為に、ほんの小さな力や意見でも添えつつ生きていけたらいいと思う。

入選

持続可能な社会においての水の重要性

長崎県 学校法人九州文化学園九州文化学園中学校 一年 黒田 美也

私の住む佐世保市には、絶滅危惧種である「生きている化石カブトガニ」が生息している。カブトガニに初めて出会ったのは五年生の時だった。恐る恐る観察すると固く大きなエイリアンのような生物が、この世に存在していることを知り大変おどろいた。

私は、だいやエコクラブのリーダーを務めている。そして、この生物をもっと知りたいと思い、クラブのメンバーと「カブトガニもつと知り隊」を結成した。水族館へ通い、観察会に参加し、第一印象とは違いおとなしく人間に害のない生物で、血液は人間の医療に貢献していることを知り、さらに興味が高まった。カブトガニが生息できる海は、豊かな干潟や美しく浅い穏やかな海である。このことから「美しい海のバロメーター」であると分かった。二億年前から姿が変わらず人間の命を救うカブトガニを守らなければという強い思いが、私の中に芽生えた。そして、「カブトガニもつと知り隊」は「カブトガニ守り隊」にレベルアップした活動を開始した。「どうすれば守ることができるだろうか」と考え、私の住む街の身近な川「小佐世保川」を保全することにした。小佐世保川は、カブトガニの生息する佐世保市の干潟へとつながっているため、保全する必要があると考えた。

まず、川の水質を調べるため国土交通省と環境省が実施する全国水生生物調査に参加した。調査の結果、上流から下流までとてもきれいな川と納得できた。きれいな川にしか生息できないたくさんの生物を採集し、ホタルの幼虫、プラナリア、沢ガニ、ヤマトシジミ、ウナギも生息していた。小佐世保川は天然川と人工ろ過材が天然の浄水場の役割を果たし、護岸された人工川の段差が川の水にたくさんの酸素を含ませる。このような工夫や下水道の普及が川の水質を守り、海の生態系を保全し

ていることを知った。このような努力で水質が守られているが、川や海を汚す原因となるゴミが多く捨てられている現状に胸を痛めた。

川に捨てられたゴミだけではなく道端に捨てられたゴミも雨や風で川に流れ込んでいると考え、市道の清掃活動も始めた。ゴミの種類は川と同じで、缶、ビニール袋、タバコの吸い殻だった。その中でもタバコには、生物を殺す有害物質が含まれている。川に流れ込むのを食い止めるためにゴミ拾いをして、翌日には捨てられている、その繰り返しだった。ゴミ問題は簡単に解決しないと痛感し、清掃活動を継続しながら他にできることはないかと考えてみた。そして、きれいな水を守るために誰にでも簡単にできる「暮らしの中の生活排水対策」へとたどり着いた。生活排水を出している私たち自身が、少しの努力で川へ流れ込む汚れを減らすことができる。食事は必要な分だけ作る、残り油は継ぎ足して使う、やむを得ず捨てる時には新聞紙に吸わせて燃えるゴミへ、水切り袋と三角コーナーを利用して細かいゴミを流さない、お風呂の残り湯は洗濯に使う、洗剤やシャンプーは適量を守る、などのエコ活動に取り組んでいる。これらのことを啓発するため、だいやエコクラブでは、人間と生物のためにできる「MY行動宣言5つのアクション」の環境紙芝居をイベント会場や公共施設で行っている。一人の力では無力だが、たくさんの人へ啓発し実行してもらえれば、大きな力になると信じ、この活動を継続するつもりだ。

私たち人間の生活は自然とつながっていて、生物に良くも悪くも影響を与えている。全ての生物の命の源である「水」を守るために私は地球のリーダーとしての自覚を持ち、持続可能な社会を実現するために責任ある行動ができる人間になりたい。それを実現できれば、私の大好きなカブトガニと同じ地球の仲間として、これからも共存できるだろう。

入選

水の恵みに感謝する

熊本県 玉名市立玉名中学校 二年 山下 真愛

祖父母の家へ向かう道の最後の曲がり角に、大きなタンクがある。直径約十メートル、高さ五メートルほど。壁面には、玉名市の名物である高瀬目鏡橋と、花しようぶが描かれている。

幼いころから、何度となく横を通り過ぎてきて、「この建物は何だろう？」と、いつも思っていた。

ここは、溝上水源地という。このタンクの下で、地下水がくみ上げられている。今回調べて分かったことだが、玉名市で上水道が普及している世帯の約三分の二が、ここでくみ上げた地下水を利用しているという。まさに、玉名市民の命を守っている大切な水源が、こんな身近なところにあったのかと、とてもおどろいた。

小学六年のとき、この水源地のすぐとなりの田んぼで、田植えをしたことがある。ふだん私は、同じ玉名市内だけれど、そこから車で十分くらいの住宅地に住んでいる。そのときは、私の地元の子どもの会の行事で、小学生十人ほどが参加したが、みんな田植えは初めての経験だった。

田んぼに足を入れたとき、ぬるぬるとしたどろの感覚がとても気持ち悪く、苦手な虫もたくさんいて、最初は早く田んぼから出たくてしようがなかった。

でも、苗を三、四本ずつ、人差し指と中指と親指でつまんで、どろに差し込むように植えて行くうちに、足の感触にも慣れて、だんだん楽しくなってきた。

約一時間で、田んぼ一枚の半分くらい進んだ。そのころには汗びっしょり、手足はどろだらけになり、腰がとても痛かった。

終わってから、田んぼのわきにある、地下水のポンプで、みんな泥を落としたり、体を洗ったりした。このときの水の冷たさと、どんどんわき出てくる水量、そして、何より、すみ切った水のきれいに、とても感動した。あまりの気持ちよさに、顔を何度も何度も洗って、手ですくっ

てごくごく飲んだ。「こんなにきれいでおいしい水が、ここで生まれているんだな」と、私は自分のふるさとをほこりに思った。しかも、この水が玉名市全域に送られていることがとてもうれしかった。

ひとつ思い出したことがある。それは、大分県に住む父方の祖父母が、熊本に来るたびに、

「熊本の水はおいしいなあ。」

と言って、おかわりして飲んでいた。祖父母に聞いたら、大分は川の水を消毒して水道水に使っているそうだ。水道水を地下水でまかなっている自治体は全国でもめずらしいということも教えてもらった。私は、「天然のミネラルウォーターが水道から出てくるなんて、こんなしあわせなことはない。大事に使わなきゃ」と思った。

自分たちで田植えしたお米は、秋に収穫して、おにぎりにして食べた。もちもちして、ほんのり甘くて、今まで食べたおにぎりの中で、一番おいしいと思った。

そのおいしさの理由は、自分たちで植えたということだけでなく、とてもきれいな水と、豊かな自然の中で育ったからだろうと思った。

祖父母の家の周りは山ばかりで、これまでは何にもなくてつまらないなと思っていた。でも、そうした豊かな自然があるからこそ、きれいな水が生まれ、その水によっておいしい米や農作物ができる。

私たちが当たり前に感じていることは実は当たり前ではなく、貴重な財産なのだ気づかされた。これからはそのことに感謝の気持ちを持ちながら、日々の生活を過ごし、将来の子どもたちにもこの素晴らしさを伝えていきたいと思う。

入選

地域で守る祓川

大分県 大分西中学校 三年 土岐 百合子

奥へ奥へと進んでいく。ほんの一筋のきらきらした流れが、土からしみ出ているところにたどりついた時、なんともいえない感動をえたのを覚えていきます。

三年前の初夏、上八幡地区の子ども会七人でだれが言いだしたともなくはじめた、森の中探検をしたときのことでした。手首がつかるかつからないかぐらいで、くつが一足分ぐらいの浅くて細い川すくえるはずもないのに、みんな夢中になって、手のひらにその水をうけようと競って手を差し出しました。ぶら下げていた水筒の中の麦茶よりも冷たく汗をかいていた体をいやしてくれました。そのひんやりとした感触は、今でも鮮明によみがえります。蛇口をひねれば、いつでもいくらでも触れられるものなのに、初めて水が生まれてくる本当の姿を見た瞬間は、まるで宝石でもみつけたかのような興奮に包まれました。私は生まれた時からずっとこの地で育ってきて、目に入る豊かな自然だけを味わってきたように思います。この山の中に、こんな場所がかくれていたなんて。

今度は、その川に沿って下っていくことになりました。少しづつ川幅が大きくなり、そのうち、水の流れるチョロチョロという音が聞こえはじめ、流れが他の川とも合流し、流れが速くなっていききました。途中、歩けないような場所に行きあたりました。しかしなぜでしょう。だれ一人として、もうやめようという人はなく、まだその探検は続きました。遠くに流れを確認しながら、歩き続けました。辺りはすっかり明るくなり、たどりついたのは、いくつもある田んぼでした。あの水が、広い田をうるおし、空と空を浮かぶ雲をうつし出している光景は、ずっと見ていたいと思うほど素晴らしいものでした。私は感動にひたって家に帰り、家族にその様子を話しました。家族の話によると、その川は何と小学校の横を流れる祓川につながっているということでした。登校中、いつも流れる祓川は、何の感動もなく、むしろ、汚れているという感じです。

ゴミがあり、自転車まで、落ちていることすらありました。それでも以前に比べれば、ずいぶんきれいになったそうです。昔は、生活用品が流れ、異臭がしていたほどでした。私たち人間は水なしでは生きていけません。しかし、水道をひねれば簡単に出てくる水に、いつの間にか感謝の気持ちも忘れ、使いたいだけ使い、そうして汚したまま流します。異臭を放つまで、まちがいに気がつかないでいたのです。平成十八年から川の浄化目的に、竹炭をつくって設置する作業が始まり、私たちも、地域の人といっしょに、竹炭づくりに参加しました。その竹炭を祓川に敷きつめたり、生活排水の落とし口に設置したりすることによって、水質の浄化に取り組むのです。毎年、何となく参加していたのですがあの探検をした年は活動への意識がこれまでと全くちがいました。水もきれいにしたい、しなければいけないという強い思いで参加しました。そして、今まで見ていたコイや、白サギ、カルガモの存在に改めて気付き、これまでの活動が実った証だと実感したので。この活動をこれまで行ってきた地域の人々たちへの感謝の気持ちもわいてきました。

今では、ホタルも舞います。活動を始めたころの人たちは、ここまで水質が回復すると予想していたのでしょうか。この活動によって得たものは、水質の回復だけではありません。地域の絆も、そして、世代を越えた交流も……。これからも美しい祓川であるように、私にできることを見つけ、取り組んでいきたいと思えます。

入選

水でつながる

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 二年 菊池 心音

私の故郷は、宮崎県延岡市という場所です。五ヶ瀬川や大瀬川など、国内でも有数の美しい川がたくさん流れていて、「水郷のべおか」とも呼ばれています。延岡市が水郷と呼ばれているのは、もちろん様々な美しい川が流れているからなのでしょう。しかし私は、延岡市が「水郷」と呼ばれている理由とは、美しい川が「存在している」からだけではないと思います。

例えば、美しい川があることによってはぐくまれてきた、「文化」です。一つ、例にあげるとするならば、「あゆやな」です。あゆやなどは、川をせきとめ、一部に流れ口を作り、産卵期のアユが川を下ってくるのを利用して「おてす」に打ち上げるといふ延岡の伝統的な漁法で、秋の風物詩です。「やな漁法」を行っている地域は多くありますが、延岡市のもほど巨大なものは他に類を見ません。私は、小学四年生のときに校外学習でこのあゆやなを見学しました。幸運にも私は、アユがおてすに打ち上げられる瞬間を目にすることができました。秋の澄みわたるような青空の下、鋭く照りつける日の光をはねかえしてキラキラと光り、しぶきを上げてはねるアユの姿は、あの日の私の感動をそのままに、私の中に確かに記憶されています。これは、「川」なくしては決して成立することはない、川があることで芽生え、はぐくまれてきた文化であり、見られる風景です。

美しい川なくしては成立しないものはありません。その代表格とも言えるのが「ホタル」です。北川は、夏になると川遊びをしに来た人や、バーベキュー、キャンプをしに来た人たちが川原がうめつくされ、とてもにぎやかになります。しかし、夜になるとそこはうつつ変わって、シンと静まりかえった川原に、ホタルたちがたくさん現われます。フワッと灯ったかと思えば消え、灯り、また消える。そんな光景が川原のあ

ちこちで見られます。水面にうつるホタルの光が、あたりをより幻想的にうつつ出します。その様子はまさに「別世界」です。とても澄んだ美しい水でしかこのような風景を見ることはできません。現代において、これはスカイツリーから見下ろす景色よりも価値があると思います。そもそも延岡市は、五ヶ瀬川と大瀬川を中心に発展していった城下町です。よって、川がなければ今の「水郷のべおか」は存在していなかったでしょう。この街自体が最も川の恩恵を受けているのであり、それが「水郷」と呼ばれる一番の理由なのかもしれません。

延岡市が「水郷」と呼ばれる理由は、市内にある多くの清流のもとで、着実に根を張りはぐくまれてきた文化や、今なおホタルが飛び交うほどの豊かな自然、そして何より、川を中心に発展してきたという歴史があるからだと思えました。川には、水には、「生きるため」だけでなく、文化を育て、自然を育て、「未来」を育てるほどの力があります。

現在の私たちにとって、水はどのような存在なのでしょう。ただただ、生命を維持する道具として、生活用水や工業用水として機械的に使ってしまったのではないのでしょうか。水資源は限りあるものであり、できるだけ大切に扱わねばなりません。現在ある川を、海を、水を「美しく」保全し、守ることは、文化、自然、そして私たちの未来を守ることであり、より豊かにすることに他なりません。水を守るためにとった行動は、まわりまわって最終的には自分のためになります。文化。自然。未来。自分。これら全てのために今自分にできること、そしてこれからする必要のあることを十二分に理解し、実行していきたいです。

入選

もつたいたないをなくす

鹿児島県 出水市立高尾野中学校 三年 高牟禮 華乃

「もつたいたない」それは、誰もが聞いてきたはずの言葉。分かつてはいるけれどなかなか意識することが難しい。私は、家庭・技術の授業で水について学んだ。私たちの住んでいる地球は「水の惑星」といわれ、表面の約七〇パーセントが海で覆われている。これだけ大量の液体が水だと分かっているのは太陽系の中ではこの星だけである。これだけ水があるのだから、毎年いくつもの水による災害や事故が発生している。また、水も資源なので必ず限りがある。そのような水とうまく生活していくにはどうしたらよいだろうか。

日本の食料自給率は約四〇パーセントと少なく、ほぼ外国からの輸入に頼っている状態である。この食料自給率と水はどのように関係しているのか疑問に思った人もいるだろう。それはバーチャルウォーター（仮想水）だ。これは、食料の生産に使用される水の総量のこと、仮にとうもろこし三〇五本を生産するとすれば、約一八〇〇リットルの水が使用される。つまり、食料を輸入するということは、バーチャルウォーターを輸入することと同じであるといえる。

また、私たちは常に災害にも向き合っていかなければならない。今から約二十六年前、平成五年六月のこと、梅雨前線の影響で鹿児島県を中心に「八・六豪雨災害」が起こり、死者・行方不明者二二一名、負傷者三四八名を出し、被害総額はおよそ三〇〇二億円にもなった。

この災害を受け、各地域では水害対策の工事が行われている。例えば、川幅を広げる工事。これは、川を氾濫させることなく水を多く流すことができる。また、ダムなどの利用。水の量を調整することができ施設などがある。しかし、いくら対策工事を行っても私たち一人一人が水のことについて科学的に理解し、気を付けなければ、死者・行方不明者、負傷者を減らすことは難しいであろう。

では、私たちはどのように災害から身を守り、水を大切にしていけ

ばよいだろうか。私が考えるにそれは四つある。

一つ目は水害ハザードマップを利用することである。自分の地域や家が、どれ程の水害リスクを負っているかを知り、早めに避難経路や施設を確認し、家族や地域で話し合っておくことが大切だと思う。

二つ目は、地域の人とのコミュニケーションだ。災害時にすぐ避難を促したり、声かけをすることが大切である。

三つ目は、水を出しっぱなしにしないこと。これは自分自身が意識していかなければならないことであり、直接節水に関わることだ。一番簡単に実行することができるだろう。

四つ目は、食器などを水で洗う前に、キッチンペーパー等で汚れや油をふき取ってから水洗いするということだ。これは少し手間がかかるかもしれない。しかし慣れればかなりの節水になる。

このように水は時には人の命を一瞬で奪う脅威にもなり、人の命をつなぐこともある。水はとてもデリケートなものなのかもしれない。だからこそ私たちは、この水の惑星「地球」にある水を生活の中で工夫して利用し、一人一人が大切に扱っていかなければならない。

また、これからも水による事故、災害の防止や対策を考え、一つでも多くの生命が失われぬように努め、十年後もその先も、水の惑星「地球」が多くの生命と水で潤っているように、今の私たちが「水」について考えなければならぬと思う。そうすれば自然と、「もつたいたない」という言葉がなくなる日が来るかもしれない。



第41回 全日本中学生

水の作文コンクール

“水の惑星”と呼ばれる地球。でもその水は、無限ではありません。海から蒸発して雲になり、雨や雪と になって地上に降り、川から再び海へと循環しているのです。地球上をめぐる限られた水を、人々は身近な生活のほか、 農業や工業など多くの場面で便利に使っていま す。その一方で、ときには洪水や水不足の被害に見舞われることもあります。水の恵みを利用し、災害を防ぐために、はるかな昔から現在まで、人々はさまざまな努力をしてきました。水とのつきあい方の工夫は、町の中のいたる所で目にするこができます。あなたにとって、水とはどんなものですか？暮らしの中での体験や、授業で学んだことや調べたこと、水についての考えを作文にまとめてみましょう。



メインテーマ

水について考える
(個別の題名は自由)

原稿(記載要領)

- ①400字詰原稿用紙4枚以内、日本語で記入された個人作品
- ②本文の前(原稿用紙枠内)に題名、学校名(ふりがな)、学年、氏名(ふりがな)を明記

*最優秀賞及び優秀賞の受賞者を8月上旬に表彰式に招待し、賞状等を授与します。第40回は全国から14,151編が寄せられました。

【主催】水循環政策本部、国土交通省、都道府県

【後援】文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構、全日本中学校長会

応募締め切り

2019年00月00日(○)

提出先(問い合わせ先)

「国土交通省水管理・国土保全局 水資源部水資源政策課」
〒100-8918東京都千代田区霞が関2丁目1番地3号
TEL:03-5253-8386(直通)

入賞発表

2019年7月中旬頃

表彰(予定)

○内閣総理大臣賞(最優秀賞)	1編
○厚生労働大臣賞(優秀賞)	1編
○農林水産大臣賞(優秀賞)	1編
○経済産業大臣賞(優秀賞)	1編
○国土交通大臣賞(優秀賞)	1編
○環境大臣賞(優秀賞)	1編
○水の週間実行委員会会長賞(優秀賞)	1編
○(独)水資源機構理事長賞(優秀賞)	1編
○全国中学校長会会長賞(優秀賞)	1編
○全日本中学生水の作文コンクール 中央審査会特別賞(優秀賞)(必要に応じて)	1編
○入選	約30編
○佳作	約100編

8月1日は「水の日」、8月1日～7日は「水の週間」です。

※詳しくは「水の日・水の週間」ホームページ
(<http://www.mizunohi.jp>)をご覧ください。

水の日 検索



第41回「全日本中学生水の作文コンクール」概要

- 1 応募要領
- ① テーマ・・・「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象・・・中学生（令和元年度に中学校に在学中の者、または、これらの者と
同じ学齢の者を含む）
 - ③ 原稿枚数・・・400字詰原稿用紙4枚以内で日本語により表記された個人作品
 - ④ あて先・・・中学校等の所在する都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する
者にあつては、国土交通省水管理・国土保全局水資源部
 - ⑤ 応募期間・・・令和元年6月3日（月）までに国土交通省水管理・国土保全局水資源部あて
到着分有効
 - ⑥ 版权等・・・○応募作品は自作の未発表のものに限る
○応募作品の使用権は、主催者に帰属する
○応募作品の返却は行わない

2 審査 応募作品12,760編のうち、各都道府県の地方審査を経た174編及び海外日本人学校より送付された
6編について国土交通省水資源部による内部審査を行い、中央審査会の対象となる42編を選出。
令和元年7月1日に開催された中央審査会において、最優秀賞1編、優秀賞9編及び入選32編
あわせて42編の入賞作文を決定。

3 表彰 (1) 賞および賞品

賞		賞品
最優秀賞	内閣総理大臣賞	賞状、副賞
優秀賞	厚生労働大臣賞	賞状、副賞
	農林水産大臣賞	
	経済産業大臣賞	
	国土交通大臣賞	
	環境大臣賞	
	全日本中学校長会会長賞	
	水の週間実行委員会会長賞	
	独立行政法人水資源機構理事長賞	
	中央審査会特別賞	
入選		賞状、副賞

(2) 表彰式 最優秀賞及び優秀賞の受賞者を令和元年8月1日（木）にパークタワーホール
にて開催された「水を考えるつどい」において表彰

4 中央審査委員 (50音順、敬称略)

- 石川 善成 (内閣官房水循環政策本部事務局参事官) (農林水産省水資源課長)
- 熊谷 和哉 (内閣官房水循環政策本部事務局参事官) (環境省水環境課長)
- 是澤 裕二 (内閣官房水循環政策本部事務局参事官) (厚生労働省水道課長)
- 坂本 修 (内閣官房水循環政策本部事務局参事官) (国土交通省大臣官房参事官)
- 須磨 佳津江 (キャスター)
- 玉野井 晃 (公益社団法人日本水道協会調査部長)
- 富岡 誠司 (独立行政法人水資源機構理事)
- 長崎 宏子 (元オリンピックスイマー)
- 宮田 正博 (全日本中学校長会編集部部长)
- 守山 宏道 (内閣官房水循環政策本部事務局参事官) (経済産業省地域産業基盤整備課長)

5 主催者等 主催：水循環政策本部、国土交通省、都道府県
後援：文部科学省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、環境省、
全日本中学校長会、水の週間実行委員会、独立行政法人水資源機構

第41回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

番号	都道府県名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
1	北海道	田近 ねね 峰々	まつお みり 松尾 美利	—	—	—
2	青森県	きや しゅうたろう 木谷 柁太郎	おとうら 小陽	つじ はるき 辻 啓生	ほそごえ あおい 細越 葵	はやし かれん 林 かれん
3	岩手県	おやま ゆめ 小山 優芽	おいかわ まな 及川 麻菜	なかしま あゆみ 中島 歩	おのでら まお 小野寺 麻緒	—
4	宮城県	あべ ゆうな 阿部 優奈	おおぬま しゆび 大沼 樹妃亜	さい みれい 齋 未玲	—	—
5	秋田県	—	—	—	—	—
6	山形県	さきはら りん 菅原 里音	あしの なみ 芦野 南海	さいとう みい 齋藤 未唯	—	—
7	福島県	せきね れのあ 関根 れのあ	みつら みずき 三浦 瑞紀	さとう そうま 佐藤 そう真	のなか りつ 野中 律	たさき ひの 田崎 妃乃
8	茨城県	あみなが りり 網永 莉々	ふじしろ かれん 藤代 かれん	あおき 楓 青木 楓	うえの しゅうじ 上野 修司	たかの こうた 高野 滉太
9	栃木県	えひめま みか 海老沼 美花	さわい ゆう実 澤井 優実	うづき さき 宇根 早姫	よもぎた 萌乃香 蓬田 萌乃香	あきやま こは 秋山 こは 心花
10	群馬県	まるやま よしひろ 丸山 佳大	ふくだ ゆうか 福田 優花	ひろた かお 廣田 佳央	はらりゅうた 原 隆太	まつくら ゆい 松倉 結
11	埼玉県	かとう がい や 加藤 凱也	みぞい あいこ 溝井 愛子	やまだ まさこ 山田 真子	こすぎ さえ 小杉 彩恵	いしかわ ひでとら 石川 英虎
12	千葉県	さくらい ゆいり 桜井 悠里	もちづき みゆう 望月 美優	はまべ そういちろう 濱辺 壮一郎	もり いっしん 森 一真	—
13	東京都	ひの ぞみ 日野 希美	まつうら くるみ まつ浦 くる実	おぐに ゆり な 小國 由梨奈	すずき さつき 鈴木 彩月	ふるかわ まお 古川 真大
14	神奈川県	にしかわ まゆ 西川 真由	こいずみ あきえ 小泉 晶絵	さとう みずす 佐藤 美鈴	ふじい こころ 藤井 琴子	やながわ こころ 柳川 心菜
15	新潟県	さかい まな 酒井 真菜華	やまぐち さくら 山口 さくら	ふじむら いろ は 藤村 彩羽	さとう 希望 佐藤 希碧	いしから はるひ 五十嵐 遙久
16	富山県	おくま ゆま 小熊 夢唯	なかの ゆま 中野 友真	やまざわ まり 山澤 麻莉	—	—
17	石川県	—	—	—	—	—
18	福井県	さとう ひかり 佐藤 光	うさみ いこい 宇佐美 衣恋	しまだ あやの 嶋田 彩乃	ふくしま なつき 福島 夏生	さいとう ちさき 齋藤 千桜
19	山梨県	すずき りりか 鈴木 莉々佳	なかむら もえな 中村 萌菜	あきの ともか 秦野 友伽	せお みず 妹尾 水月	よだ にこ 依田 にこ
20	長野県	—	—	—	—	—
21	岐阜県	ひびの さえ 日比野 紗英	いしだ ひなこ 石田 陽向子	たかはし おと歌 高橋 乙歌	いとう ちなみ 伊藤 千愛	ふくろう かな菜 福富 菜菜
22	静岡県	いけだに りゆう 池谷 琉	いづか はやて 飯塚 颯	ののき 乃彩 菊池 乃彩	たなはし さき 棚橋 彩心	つちや かなた 土屋 奏大
23	愛知県	もり だいごう 森 大剛	いしかわ こうへい 石川 昂平	ふるかわ まさかず 古川 正和	まの 聡真 真野 聡真	—
24	三重県	うちだ ひなた 内田 向日葵	よねやま もね 米山 百音	ほりぐち あす は 堀口 明日羽	うめむら りき こ 梅村 理紗子	にしお かよこ 西尾 嘉世子
25	滋賀県	みきと もひと 三木 智仁	イビット 茉莉花	しらい ゆり 白井 優里	—	—
26	京都府	なかお ひな 中尾 妃菜	くさぎ ひなた 久富木 暖	さとう ゆうき 佐藤 悠季	やました りきこ 山下 莉咲子	—
27	大阪府	ふじやま ゆかり 藤山 ゆかり	おかもと まなみ 岡本 愛未	みやけ さくら 三宅 さくら	ひらの はるな 平野 暖奈	まつもと こころ 松本 琴心
28	兵庫県	みやいし あい 宮石 亜依	あまの ゆづき 天羽 悠月	はた のん 波多 環苑	こんどう かつま 近藤 克磨	うえだ きまか 植田 清花
29	奈良県	えいせい 永井 咲良	あきた 七海 明田 七海	つとむ 萌夏 土松 萌夏	ふくい 稀晟 福井 稀晟	きちい ほのか 吉井 ほのか
30	和歌山県	かもん みく 家門 美紅	とみなが はるな 富永 遥菜	おおむね ひかり 大棟 日花莉	—	—
31	鳥取県	よだ かりん 吉田 華梨	ささき はるね 佐々木 春音	—	—	—
32	島根県	—	—	—	—	—
33	岡山県	すずき さあや 鈴木 沙彩	—	—	—	—
34	広島県	たにかわ かのこ 谷川 果乃子	ほしか そうじろう 星加 壮二郎	よつじ うるみ 四辻 麗光	—	—
35	山口県	はやし ゆうか 林 優佳	まつい ゆめ 松井 優芽	いしはら まこと 石原 真人	—	—
36	徳島県	やまね ゆい 山根 ゆい	ますだ こころ 増田 心瑚	かさえ あきら 笠江 彰	すみ ゆうか 角 優花	のぐち あや 野口 彩
37	香川県	たかつか あやこ 高塚 絢湖	おおにし いろは 大西 彩巴	さとう なな 佐藤 七梨	—	—
38	愛媛県	あべ ゆうすけ 阿部 裕介	ウイジェナヤカ サクラ	なかの ゆう 中野 優	まつうら りりあ 松浦 梨々亜	もり はると 森 温大
39	高知県	—	—	—	—	—
40	福岡県	うの まさひろ 宇野 誠洋	にしむら みう 西村 美海	うの ゆりこ 宇野 由里子	みよし ななこ 三好 菜南子	うしじま ふみえ 牛島 史絵
41	佐賀県	まつい かのん 松井 伽穂	おかもと はる陽 岡本 陽	しもお たろう 下尾 虎太郎	きはら はるか 木原 春花	きたむら りゅうせい 北村 竜清
42	長崎県	くろだ みや 黒田 美也	やまだ ひなた 山下 ひなた	おののち ふうか 尾道 楓華	たむかい いろは 田向 彩花	ひさだ かなみ 久田 夏奈美
43	熊本県	きよた ゆうな 清田 友菜	やまた まい 山下 真愛	いしが おとよ 石坂 音羽	かまが けんたろう 釜賀 健太郎	ひぐち しょうこ 樋口 嬢子
44	大分県	とぎ ゆりこ 土岐 百合子	いしわ あいか 石和 愛花	はやし けいいちろう 林 慶一郎	—	—
45	宮崎県	かめおか ちさと 亀岡 千愛	きくこ こね 菊池 心音	ふくどめ あいき 福留 愛季	ほりかわ らな 堀川 羅奈	たけのうち れいこ 竹之内 玲子
46	鹿児島県	あかいけ りのん 赤池 凜音	なかむら りり 中村 吏里	たがむれ かの 高年禮 華乃	ふくなが ゆうすけ 福永 佑丞	さかもと かいせい 坂元 海暉
47	沖縄県	なかち あお 仲地 亜緒	—	—	—	—
48	海外	きのした ゆか 木下 結花	—	—	—	—

(注) 氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、☆は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選

第41回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	地方審査 優秀者数 (編)	応募学校数	応募総数 (編)			
			1年	2年	3年	
北海道	2	6	197	39	136	22
青森県	5	4	156	18	25	113
岩手県	4	7	92	5	34	53
宮城県	3	2	30	5	25	0
秋田県	0	0	0	0	0	0
山形県	3	1	6	0	0	6
福島県	5	12	446	100	212	134
茨城県	5	5	260	159	67	34
栃木県	5	5	315		126	189
群馬県	5	9	463	2	256	205
埼玉県	5	6	84	80	1	3
千葉県	4	12	477	139	329	9
東京都	5	7	619	108	251	260
神奈川県	5	12	921	375	300	246
新潟県	5	4	27	0	16	11
富山県	3	3	120	78	42	0
石川県	0	0	0	0	0	0
福井県	5	1	36	0	0	36
山梨県	5	1	8	0	6	2
長野県	0	0	0	0	0	0
岐阜県	5	3	48	1	45	2
静岡県	5	7	248	94	77	77
愛知県	4	7	26	0	4	22
三重県	5	4	575	230	310	35
滋賀県	3	7	405	227	91	87
京都府	4	5	354	136	91	127
大阪府	5	10	385	207	116	62
兵庫県	5	7	852	112	370	370
奈良県	5	6	280	30	217	33
和歌山県	3	11	489	194	210	85
鳥取県	2	1	2	0	0	2
島根県	0	0	0	0	0	0
岡山県	1	1	1	0	1	0
広島県	3	6	78	3	32	43
山口県	3	3	22	6	8	8
徳島県	5	6	44	5	35	4
香川県	3	18	84	0	41	43
愛媛県	5	15	297	3	203	91
高知県	0	0	0	0	0	0
福岡県	5	8	662	0	418	244
佐賀県	5	19	454	223	231	0
長崎県	5	4	323	76	171	76
熊本県	5	19	2,130	733	861	536
大分県	3	2	158	1	4	153
宮崎県	5	7	264	94	88	82
鹿児島県	5	8	295	101	88	106
沖縄県	1	7	21	0	14	7
海外	1	2	6	0	2	4
合計	175	290	12,760	3,584	5,554	3,622

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

		応募 学校数 (校)	応募 総数 (編)	性別		学年別		
				男	女	1年	2年	3年
				(編)	(編)	(編)	(編)	(編)
第1回	昭和54年	634	4,875	1,878	2,997	1,513	1,710	1,652
第2回	昭和55年	486	3,930	1,446	2,484	1,245	1,462	1,223
第3回	昭和56年	487	5,569	2,159	3,410	2,004	1,974	1,591
第4回	昭和57年	512	5,111	1,878	3,233	1,923	1,848	1,340
第5回	昭和58年	495	4,192	1,435	2,757	1,925	1,214	1,053
第6回	昭和59年	531	7,013	2,905	4,108	2,923	2,115	1,975
第7回	昭和60年	572	9,703	3,676	6,027	3,794	3,647	2,262
第8回	昭和61年	507	7,431	3,080	4,351	2,809	2,680	1,942
第9回	昭和62年	513	9,253	3,789	5,464	4,086	2,935	2,232
第10回	昭和63年	498	10,119	4,233	5,886	4,212	3,501	2,406
第11回	平成元年度	641	13,192	5,601	7,591	5,345	4,392	3,455
第12回	平成2年度	551	11,782	5,320	6,462	5,404	3,549	2,829
第13回	平成3年度	623	12,056	4,834	7,222	5,174	3,821	3,061
第14回	平成4年度	552	12,718	5,332	7,386	4,898	4,533	3,287
第15回	平成5年度	473	13,680	5,340	8,340	4,658	5,024	3,998
第16回	平成6年度	557	13,647	5,591	8,056	5,247	4,577	3,823
第17回	平成7年度	558	15,918	6,617	9,301	5,940	5,388	4,590
第18回	平成8年度	491	15,479	6,595	8,884	5,403	5,606	4,470
第19回	平成9年度	456	13,688	5,731	7,957	5,088	4,792	3,808
第20回	平成10年度	493	13,764	5,935	7,829	4,842	4,609	4,313
第21回	平成11年度	429	11,903	4,971	6,932	4,324	4,059	3,520
第22回	平成12年度	413	14,283	6,288	7,995	4,737	4,968	4,578
第23回	平成13年度	362	11,841	5,131	6,710	3,862	3,844	4,135
第24回	平成14年度	413	13,442	6,159	7,283	4,878	4,691	3,873
第25回	平成15年度	453	13,385	5,980	7,405	4,100	4,618	4,667
第26回	平成16年度	452	16,488			5,595	5,655	5,238
第27回	平成17年度	439	15,726			4,489	6,464	4,773
第28回	平成18年度	373	16,038			5,157	5,811	5,070
第29回	平成19年度	385	16,173			5,242	5,697	5,234
第30回	平成20年度	339	14,927			4,516	5,118	5,293
第31回	平成21年度	344	16,462			4,929	6,038	5,495
第32回	平成22年度	378	16,941			5,592	5,925	5,423
第33回	平成23年度	365	19,618			6,930	6,635	6,052
第34回	平成24年度	368	16,826			4,542	6,692	5,591
第35回	平成25年度	368	18,191			5,564	6,602	5,924
第36回	平成26年度	331	19,419			6,555	7,406	5,365
第37回	平成27年度	345	16,432			5,197	6,949	4,280
第38回	平成28年度	314	15,246			4,533	6,110	4,603
第39回	平成29年度	357	16,725			4,735	6,910	5,080
第40回	平成30年度	314	14,151			4,182	5,750	4,219
第41回	令和元年度	290	12,760			3,584	5,554	3,622
合計		18,462	530,097			181,676	190,873	157,345

- (注) ・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)
 ・第35回においては学年未記入者101名を、第36回においては学年未記入者93名、
 第37回においては学年未記入者6名を学年別集計から除いている。

第41回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作品12,760編の中から選ばれた最優秀賞1編と優秀賞9編の受賞者の表彰式は、令和元年8月1日（木）に東京都新宿区のパークタワーホールにおいて開催された、「水の日」を記念する政府主催行事「水を考えるつどい」内で実施されました。



最優秀作文の朗読

福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校1年 宇野 誠洋さん（内閣総理大臣賞受賞者）



作文コンクール受賞者と各賞授与者



国土交通省

Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism

国土交通省水管理・国土保全局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/index.html>